
咲-saki- 『花鳥風月の牌譜』

敵はいただくぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲 - s a k i - 『花鳥風月の牌譜』

【Nコード】

N 8 3 3 7 P

【作者名】

敵はいたくぜ

【あらすじ】

高確率で嶺上開花や海底摸月が出来る様な天運はないが平凡でもない。4月某日、少年は清澄高校麻雀部の見学の筈が女子校に登校していたのだった。

この物語には『麻雀＋青春×セクハラ』成分が多分に含まれております。麻雀のルール解説もしますので、ルールを把握していない方も気軽にどうぞ。

麻雀ルール／用語

「さあ皆集まっつて。お待ちかねの咲スレだよ」

〈設定〉

牌表現

【萬子・筒子・索子・字牌】
の順番となる。

萬子は漢数字

【一二三四五六七八九】

筒子は英数字

【123456789】

索子は旧漢数字

【弍弍参肆伍陸漆捌玖】

で区別する

暗槓に対する搶槓は国士無双のみ

ローカルルールは基本的には不採用。名称が出る可能性はある。

（進行）

麻雀では4の面子と1の対子を作る遊技である。連続した数か同じ牌が3枚で1面子であり、一対のペアが頭である。

反時計回りに親から東・南・西・北とし、順番に牌を拾っていく。

136枚の牌から全体で最大122枚まで引くことができる。（用語）

『萬子 マンズ』

牌の読み方は ワン

『筒子 ピンズ』

牌の読み方は ピン

『索子 ソーズ』

牌の読み方は ソー

『順子 シュンツ』

連続した3枚の数牌。

『刻子 コーツ』

3枚の同じ牌。

『槓子 カンツ』

4枚の同じ牌。

『雀頭 ジヤントー』

2枚の同じ牌。対子^{トイッ}

『副露 フーロ』

他家の牌を鳴いて得ること。

『チー』

直前の捨て牌で順子を作る場合にする副露。

『ポン』

他家の捨て牌で刻子を作る副露。

『カン』

槓子を作る副露。他家から副露する場合は明槓。ツモのみで出来た場合は暗槓と呼ぶ。基本的には刻子に似た扱い。枚数調整のために

嶺上牌を1枚取り、海底牌が手前にずれる。

『和了 ホーラ 』

役の完成。アガリ。

『聴牌 テンパイ 』

和了の直前の形。

『一向聴 イーシャンテン 』

残り1枚で聴牌となる形。二向聴、三向聴などもある。

『ロン 』

他家の捨て牌での和了。

『自摸 ツモ 』

自摸牌での和了。嶺上牌でも可能。

『嵌張待ち カンチャン 』

和了に必要な牌が順子の中央の牌となった聴牌。

『辺張待ち ペンチャン 』

順子で12及び89から3か7を待つ聴牌。

『両面待ち リャンメン 』

和了に必要な牌が順子の端の牌となった聴牌。

『シャボ待ち 』

2組の雀頭からなる待ち。一見有利だが残りは4枚以下となっている。

『単騎待ち 』

和了可能な牌が1種類しかない。

『打牌 ダハイ 』

牌を減らす動作。

『王牌 ワンパイ 』

積された時に5枚目までのドラ表示牌となる。自摸できない14枚の牌。

『河 』

牌を捨てる場所。

『符・翻 』

符は満貫以下での点数計算に必要。翻は満貫以上の点数計算でも必要。

『ドラ』

和了できる役ではないが、翻数が枚数分上がる。ドラ表示牌の次の数か字がドラ。立直した場合はドラの下牌もドラ表示牌扱いとなる。

『老頭牌』

数牌の1と9。

『幺九牌』

老頭牌と字牌。

『門前』

副露なしでの和了。

『亜空間殺法』

ほとんどの場合は、ハツタリで副露すること。普段とは違った打ち方を差す。

く役名一覧く

1 翻（鳴き）

役牌

立直（門前のみ）

一発（門前のみ）

平和（0）

門前摸月（0）

断幺九（0）

食い断幺九（1）

一盃口（0）

海底摸月

河底撈魚

搶槓

嶺上開花

2 翻

混全帯幺九（1）

一気通貫（1）

三色同順（1）

三色同刻

七対子

対々和

三暗刻

小三元

三槓子

混老頭

ダブル立直（門前のみ）

3 翻

二盃口（0）

混一色（2）

純全帯幺九（2）

6 翻

清一色（5）

役満

四暗刻（0）

緑一色

清老頭

四槓子

大三元

国士無双（不可）

四喜和（大、小）

字一色

九蓮宝燈（0）

天和

地和

く作り方く

立直 リーチ

他家からの副露をせず、千点棒を場に出し、聴牌宣言をする。千点棒は和了した者に与えられる流局した場合、場に残る。

一発 イッパツ

立直から次の自分の自摸以内に和了する。チーやポンが入ると打ち消し。

平和 ピンフ

4 順子と雀頭。門前で両面待ち、雀頭が役牌以外の場合のみ成立。

門前摸月 メンゼンモユエ

副露なしでの自摸和了。

断么九 タンヤオチュウ

么九牌を使わない役。副露して良い場合は食い断么九。『咲 - s a k i - 』では採用されている。

一盃口 イーパーコー

同じ順子が2つある役。

海底摸月 ハイテイモユエ

王牌の直前の海底牌での自摸。

河底撈魚 ホウテイラオユイ

最後の打牌による和了。

搶槓 チャンカン

他家の槓子が和了牌であればできる和了。国士無双以外は明槓からしかできない。

嶺上開花 リンシャンカイホウ

嶺上牌での和了。

2 翻

混全帯幺九 ホンチャンタイヤオチュウ

面子と対子に必ず幺九牌を含む。一種類は字牌が入る。

一気通貫 イッキツウカン

萬子、筒子、索子で123、456、789の順子を揃える。

123345567789 + 雀頭】の形は認められない。

三色同順 サンシヨクドウジュン

通称サンシヨク。萬子筒子索子で同じ数字の順子を作る。

三色同刻 サンシヨクドークー

同じ数の刻子を3つ作る。

七対子 チートイツ

全て異なる対子7組。変則的形態。

対々和 トイトイホー

4刻子と対子。

三暗刻 サンアンコー

鳴かずに刻子を3つ作る。

小三元 ショウサンゲン

三元牌、白發中の刻子2つと雀頭。

三槓子 サンカンツ

槓子を3つ。

混老頭 ホンロートー

字牌を含み、幺九牌での対々和か七対子。

ダブル立直

一巡目での立直。

3 翻

二盃口 リャンペーコー

一盃口を2組。七対子にはならない。

混一色 ホンイーソー

字牌と一種類の数牌。

純全帯幺九 ジュンチャンタイヤオチュー
字牌を使わない全帯幺九。

6 翻

清一色 チンイーソー
一種類の数牌で作る。

役満

四暗刻 スーアンコー
4つの暗刻を作る。

緑一色 リューイーソー

索子の23468と發のみの役。發は無くともよい。

清老頭 チンロートー

1と9のみ。

四槓子 スーカンツ
槓を4回する。

大三元 ダイサンゲン

三元牌全ての刻子を作る。

国士無双 コクシムソウ

幺九牌全てに幺九牌1枚。七対子と同じく変則的形態。

四喜和 スーシーホー

方角を示す牌、風牌で4刻子又は3刻子1対子を作る。

字一色 ツーイーソー

字牌のみを使用。

九蓮宝燈 チューレンポトー

【111123456789999+?】

門前でしか認められない9面待ち。同種の数牌で和了。

天和 テンホー

配牌で既に和了できる親専用の役。

地和 チーホー

子の第一自摸での和了に付く役。なお、ここでは人和 レンホー
はローカル役である。

1／9の読み方。

『イー』『リヤン』『サン』『スー』『ウー』『ロー』『チー』
パー』『チュー』

牌譜1：『奔放者』（前書き）

掲載
2010/12/31

牌譜1：『奔放者』

長野県某所、清澄高校昼休み。

清澄高校の麻雀部は去年まで幽霊部員に支えられて存続してきた。活動していたと数えられる人数は実質2人。当然の如く大会には出られず、実績を残さなければ正しく存亡に関わってくる。

部長が生徒議事会長という事実が辛うじて、廃部の意見を薄くしているのだが、やはり問題の先送りでしかなく、未だに最後の大会への参加の条件すら満たしていないのだ。

「部長、今年の新入生は入りそうかのお？」

麻雀部は面子の足りない部であるため、ポスターや呼び込みで募集をしている。部長の竹井久に訊ねたのは同じ麻雀部の2年生の染谷まこである。

「わからないわねー。男子なら1人確定だけど……」

麻雀部の存続になれば男子部員も歓迎であるが、生憎大会は男女別なのだ。部内で打つならあと1人、大会参加までは最低でも女子が更に3人必要なのだ。

「そうじゃのお。うちの雀荘はアテにできんが、去年の女子インターミドル優勝の原村っちゅーのがうちに入ったようじゃ」

まこは眼鏡の位置を直し、不敵な笑みを浮かべる。

「そうなの？その子で芋づる式に部員が集まらないかしら？」

楽天的な調子であるが、それは大会出場のための一時的な部員確保もできるからだ。当然素人では勝ち辛いことから勧誘自体は真面目に行う。

「生徒議事会の用事で遅れるから、部室の方は頼むわよ」

「ほい分かった。アテのある男子っちゅーのはやはりあいつか？」

久の目星とまこの指す人物は同様であり、久は気まずそうに頷いた。

「今年は賑やかになりそうじゃのぉ」

「はぁ……まこはアレの被害が少ないから気楽でいられるのよ。精神的には遅効でくるし」

久は自分の頭を押さえながら左右に振る。

「見た目は所謂好物件、性格も友好的。……じゃが、アレがのぉ」

まこと、特に久を悩ませる特性に2人のため息が重なる。

「あの、セクハラ体質」

「しかも、いやらしくない自然な手口じゃからな」

夏の大会に向けての部員勧誘を張り切ろうとしていた2人は短時間でかなり憔悴してきていた。

しかしそうだった失意からの回復に既に馴れているからか、2人は部活動終了時刻には一切の翳りがなかった。

「片岡さんと原村さんが入ってくれたから、女子はあと1人ね。ついでに須賀君もいるから交代しながら打てるし」

久とまこは旧校舎にある部室の戸締まりをしている。

「須賀はもろ初心者じゃったがな」

2人は同年代だけの麻雀は久々だった。まこの家のメイド雀荘で年上相手に麻雀をするとしても、接客の範疇なのであまり良い経験にはならない。

「……部長の従弟、来んかったのお」

「……原村さんたちのことで忘れてたわ。どうせ休んだか、電車の乗り過ぎしね」

色々と問題児である久の従弟は、そこにいなくとも久とまこを落ち込ませていた。

その年の入学式は日差しが心地よく、春爛漫であつた。高等学校の新入生の慌ただしくも新鮮な日々も一先ずの峠を越え、しかしながら色褪せることを許さないかのように部活動への体験入部の時期となる。

この日、近隣の高校も含め部活動が解禁となつたのだ。

「はよー、ッス」

ある清澄高校1年生の男子は、遅刻直前で教室に辿り着いた。方々から挨拶が返ってきた後に、クラス内は日常に戻ろうとしたのだが、少年に視線が集まつた。

「な、何故ここにいるのでしょうか？」

一人の女子生徒が意を決して少年に訊ねる。それに周囲も同じ疑問を持っているのだ。

「あ、あれッス。よ……用務員？」

ここは風越『女子』高校。少年、上埜了ウエノリヨウが迷い込んだ男子禁制領域である。

朝のHRからそのクラスで、了の存在は何度か質問されることはあっても拒まれることはなかった。最初の授業は理系生の数学だった。クラスの半数が文系選択者なので了は空いた席に座っている。

「おろ？この匂いは……」

ある香りに視線を巡らせると、一人の少女に目が留まる。HRの前後にあつた了関連の話題で盛り上がるクラス内で、その輪に入らなかった少女である。

そのことを思い出すまで凝視していたため、少女も気付いて了を不思議そうに見る。

「どうしたの？用務員さん」

沁みるような少女のおっとりとした声。それは彼女の優しそうな容姿によく似合っている。

「うえ？あ、ちょっと匂いがしたから」

「わ、私、そんなに臭うかしら……」

酷く衝撃を受けたかのように落ち込む少女の様子から、了は慌てて訂正をした。

「言い回しが悪かった。麻雀の気配みたいなモンだよ」

ここには確信等なく、何となくといった、しかし的中率が高いオカルト染みた直感である。

「もう、びっくりしちゃったわ。それなら用務員さんも麻雀をするのかしら？」

誤解が解けると少女は柔和な笑みに戻る。放課後まで了はこの少女と同じ授業を受けたのだが、数学と現国以外は理解不能な領域だった。

この日の風越女子の授業は4時半ばで終わり、部活開始までは20分の余裕がある。それまでの一日を麻雀少女の福路美穂子と共に過ごしたため、接する距離感はかなり縮まっている。

放課後におつとりとしたマイペースな美穂子が実は麻雀部の部長だったという事実を、部室掃除の最中に知ったり、余った時間中ずつとハグしたりしていた。

「部員の娘は皆良い子なのよ。だから、麻雀をいっぱい楽しんでほしいの」

美穂子の純粹で、綺麗な笑顔。了の右手は美穂子の髪を撫でていた。

「みほちゃんと打てたら楽しそう……いや、絶対楽しいな」

安心感のある手のひらの温もりと共に紡がれた言葉に、不意を突かれた美穂子は小さく笑う。

「ふふ、本来なら『部外者』はダメなのよ？でも、今日は『体験入部』ができるから……ね？」

開かれた美穂子の色違いの左右の瞳が了を捉えている。悪戯っぽく、艶やかな視線に対して手のひらの温もりが応えるように髪を撫でていた。騒がしい廊下からも、駆ける音からも、勢いよく開けられた部室の扉からも切り離されたような気分となる。

「キャプテン！手伝いに来ました！……ってアンタ誰だしっ！」

嵐のような活発な少女が飛び込んできた。びしっ、と了に向かって人差し指を伸ばしている。

「ふっ……ある時は用務員。そしてまたある時はセクハラ執事。……しかアし！それは仮の姿的なアレだ！」

音声抜きならばシリアス、といった雰囲気肌にピリピリしている。

「謎に包まれたその正体は！清澄高校！1年男子だったりもする！」

了の決め台詞に合わせた爆発の効果音に合わせたフラッシュの幻聴と幻覚が迸る。

「えっちなのはダメよ？」

「つーか、新しく分かったの学年だけだし！」

清澄高校の制服なので、有益な新しい情報は学年だけだった。

「華菜、この人は上埜了君っていうの。了君、この娘は池田華菜。私の自慢の後輩よ」

2人の間に立った美穂子の仲裁で勢いだけは抑えられたが、華菜は美穂子の後ろから了を警戒している。

「警戒をされてしまったな。よし、この右手で握手をしてやろう」

了は顔の前で手を広げるポーリングの後に華菜に右手を差し出した。

「……よろしくしてやるし」

対面の華菜も右手を伸ばし、渋々ながらも握手が形を成そうとした瞬間にペシ、と乾いた音が鳴る。

「……今までオレの握手を拒んで叩いた人間は……4人いる。その全てに同じ不幸が訪れた」

了は無表情で淡々と語りながら、右手を左手で包む。

「そう、その全員が1週間以内に……ピンポンダッシュをして捕まったんだ。よろしい……ならば戦争だ」

「臨む所だし！」

今の状況は当に龍虎相搏つ、に相似している。但し龍と虎の代わりに『ランランルーな赤毛のピエロ』と『大和魂を持った黒猫』が対峙して見えた。

牌譜2：『兆し』（前書き）

今回は僅かに麻雀部分が入ります。

意見、感想、アドバイスがありましたら是非。

後書きに簡易解説を。

牌譜2：『兆し』

勢い任せに勝負を始めようとした了と華菜は、致命的な見落としをしていた。

了はそのことによりRPGで条件不足のため『まだその時期ではない』と繰り返してダンジョンを塞ぐNPCの必要性を理解できた。

――面子が足りないなんて。

美穂子も合わせて3人。部活動開始の定時までは5分近くあり、その事実だけでも了の先程の熱がなくなっていた。

「キャプテン、今日も精一杯頑張ります！……って何かキャプテンに抱き着いてるし！」

「知らないのなら教えてしんぜよう。みほちゃんは癒しの塊。何かもう……蕩けそう」

了は美穂子を抱きしめっていると落ち着く、母性的な天然記念物級の美少女と評価している。華菜は理由を聞いたのではなく、婉曲的に離れるように非難したのだが、それを理解した上での答えである。

「今日の部活が終わったら……みほちゃん初のメル友男子になるんだ」

美穂子は機械の操作が苦手である。それでも洗濯機等の家電は扱えるので、美穂子は家電以上携帯未満の暮らしである。美穂子はそのことで申し訳なさそうな表情をした。

「みほちゃん、ゆっくり覚えればいいよ。最初は返信できなくてもいいんだから」

「……了君」

「メル友になれたら嬉しいけど、美穂子が触れる世界が広がるなら……ね。それはきつと素敵なことだから」

それはただ、優しい声だった。下心も敬遠もなく、美穂子の鼓膜は幸福の音に震える。

- 甘えん坊だけど、ロマンティックね。名前に替えて呼んでくれ

る所も。

「何か性格違うし、口説いてるし、キャプテンも満更じゃなさそうだし！」

華菜に対するふざけた態度と全く違うため、詐欺にあったような気分になるのは仕方がない。

今日は体験入部の新入生の為に、普段厳しく指導を行うOGのコーチは参加しない。その代理で美穂子を含む数名が指導をするため対局の機会は最初が最後までらいだ。

「なら、最初がいい。相手の癖も打ち方も分からないからな。其処な少女もそれでいいか？」

「私は2年生で先輩だし！」

華菜のツッコミにキレがなくなってきた。ここまでの疲労は相当のものだろう。

「何だと？それはアレか、ちょっと小生意気な中学生って微笑ましいなあ、よし、ノリで遊んであげようみたいなこと考えてた失礼なおれがすいませんでしたッス！」

年下に対しては気分的に接し、想定外の出来事に直面した時は了にとつての体育会系の口調になる。そして普段は若干以上のセクハラをする。しかしながら自然体過ぎて心底嫌悪されることはなかった。

華菜も他聞に洩れず、否定的な心情ではなく好敵手に近い感覚である。

「これにて悪は滅びたし！」

「くっ。これで勝ったと思うなよ。だってまだ麻雀があるだろ？そうだろう？」

「ならば、全てを出し切るがいい。ことごとく華菜ちゃんが打ち砕くし」

噛み合った熱いやり取りに何故か青春の気配を感じたことで美穂子は感涙している。

「これからは華菜ちゃんと呼ばせてもらう。敬意を込めて」

「ふ。好きにしな」

すれ違いをしていた状態からの軌道修正なのか、はたまた更なるすれ違いなのかは理解に苦しむ状況だが、互いに認識を改めたことは確かだろう。

やがて100人に届きそうなくらいの生徒が集まった。ルールは東風の赤ドラ4枚でウマなし、25000点の30000点返しとなり、各局毎に入れ替えて対局をする。

東風は東一局から東四局までという意味で、ウマは順位に対する配点である。返し点は点数を数える基準となっていて、終局後の1位に差分が与えられる。

南場までの半荘が普通なのだが、今回は体験入部のため多くの回数を打つことが目的なので東風で区切るのだ。

対局の見学者も出てくるのだが、ある一ヶ所に多くの見学者が集まっている。部長と他校の男子が面子にいるのだから当然ではある。

最初の親は華菜で、南家に美穂子、西家に了がいる。北家の2年生は既に雰囲気吞まれつつある。ドラは索子の2。

- - 今の手牌は

【二三三五六七八17肆伍玖】

悪くはない。幺九牌 ヤオチューハイ から切るとするなら……

了は手牌を並べ、他家の表情を確認する。華菜は牌の左側を見て僅かに喜び、美穂子は目が合うと優しく微笑んだ。

- 華菜ちゃんには役牌があるか？ダブ東なら2翻付くな。みほちゃんは、いつの間にか誘導されてそれで怖いな。

親の和了時に得る点数は子の1、5倍である。和了すれば親を継続し、流れても聴牌ならば親を継続できる。安い役で速度を重視する打ち方もある。

華菜は6筒を捨て、美穂子は9索を捨てる。了はツモした牌を加えて1筒を捨てた。そのまま5順目になり、了は赤ドラの5萬を引いた。

- 今は頭（対子）が6つ。早和了狙いなら立直七対子。だが……

即座に雀頭を崩す。今回は早和了のメリットが少なかった。しかし警戒していた華菜の牌も進んでいるようで、和了できるかは微妙だった。

「リーチだし！」

華菜が場に千点棒を出した。現物は筒子は3と6、リーチ宣言で出した萬子の4、索子は4に6が2枚である。

- 混老頭はないだろうから恐らく混全帯幺九　チャンタ　。純正の可能性を含めても満貫は来るか。

美穂子は現物の3筒でのベタオリ。続いて了は現物の4萬をツモした。親のリーチ一発の直撃は被害が大きい。

一重に確信があるのか強引なのか、安牌は切らなかった。5索が切られる。前後が切られているとはいえ読み違えていれば立直一発に当たるだろう。

「それはハズレだ」

それらの心配は杞憂であり、華菜はそう言って通した。了は続けて2回のツモ切りをした。そのどちらも幺九牌であり、当たるかどうかの緊張や他家が進む気配が肌をピリピリ刺激する。

危険牌と予測できる幺九牌を2回続けて即座に捨てた時は美穂子も息を吞んでいたが、了は挑戦的に笑いながらも、河に捨てられてい

く牌に集中していた。

リーチ宣言をしていない了だが、美穂子は了は既に聴牌であるとして慎重に捨てている。

「あの捨て牌からたぶん……。これは通るわよね。」

運が向かないのか華菜は立直してから和了できず、その打牌の後に美穂子は危なげなくツモ切りを終えたが、濃厚に渦巻く変遷の気配に青色の右目が開いた。

「ツモ。大数隣……はマイナールールだったか。ツモタンピンチンイツリャンペー……12翻は三倍満 - 6000・12000」

【四・二二三三四五五六七七八八】

門前摸月での断么九、平和、清一色、両盃口である。1翻高ければ数え役満になっていた。加えて、華菜が使ったリーチ棒も得られるため、一気に50000点となった。

「リーチされてたら数え役満だった……」

持ち点の半分以上、13000点も失った華菜は青ざめる。立直がなくとも赤ドラ1枚で数え役満になっていた。この待ちなら50%の確率で赤ドラの5萬子が入るため、役満の可能性も視野に入る和了なのだ。

「これは両面待ちで、1萬子入れると役が下がるからな。リーチでそれを拾うよりもダマテンが安定してた」

暗槓以外の副露がなければ立直で1翻上げるとは可能だが、強制ではない。多面待ち故に役が崩れる場合や聴牌を悟られないようにする場合もあるからだ。

立直した後は手牌を変えることはできず、待ちが変化しない場合の暗槓であれば限定的に可能なのだ。

「確かに1萬子だったら立直一発門前摸月が付いても同じ12翻までよね」

一発と門前摸月がなければ倍満貫となる10翻となり8000点も低くなる。リーチせずとも4萬子であれば確実に11翻にはなるので安定感があり、更に萬子の赤ドラをツモした場合は交換ができる利点もある。

「それにきれいな役よね。何だか牌も嬉しそう」

了が対局中でなければ迷わずハグしてしまうような美穂子の台詞である。対局中での分別はあるためか、冷静な面持ちだった。

「みほちゃん、後で正面からハグするから」

分別は有ろうとも最終的な判断は単なる先送りだった。

「その、人前だと恥ずかしいわ」

「最後にも掃除するだろ？一緒に片付けた後にするから」

「うん。……でも、ちょっとだけよ？」

控え目に答えた美穂子の頬は見るからに赤らんでいる。

「そこお！キャプテンをたぶらかすなし！」

第三者的には居たたまれない空気に堪えきれなかった華菜が了を指差す。東二局に移り、牌は自動卓によって混ぜられている。

「華菜ちゃん、今は麻雀やってるんだ。集中しようぜ」

・元凶がいけしゃあしゃあと言いやがったし！

華菜の心の絶叫を他所に、何処か天然な美穂子がサイコロを転がし、配牌が始まった。

了はそれ以来終局まで、無理に派手な役は狙わず速度重視に進めていった。聴牌にならなかったのは2回だけだったが、最終的な和了回数は2回のみだった。

了：+28

美穂子：+5

華菜：-3

オカによる得点ボーナスを除けば、了と美穂子の点差は3000程度まで縮まっていたのだ。掃除当番制で残った部員よりも遅くまで掃除をしていた了と美穂子と華菜は揃って校門から出た。

「みほちゃんと華菜ちゃんって相性良いよね。性格でも麻雀でも」

了の点が極端に下がった大きな要因は2人にある。美穂子が安牌を示し、華菜も不用意な振り込みがなかった。特に美穂子の広い視野を持ちながらの読みの鋭さと流れを変えるかのような楔となる打ち方は印象深いものがある。

「でも私華菜にはいつも迷惑を掛けてしまうの。了君にそう言ってもらえて嬉しいわ」

「迷惑かけてるのはむしろ私の方です。いつも助けてもらってますし」

並んで歩く2人のやり取りが可笑しくて、了は小さく喉を鳴らした。

「今度は勝たせてやんないから覚悟しろし。……まあキャプテンも楽しそうだったから感謝はしてやる」

華菜が『も』と言った理由は微笑ましく感じたものの追及はせず、了は2人を間に入って抱き寄せた。

「写メだけど、記念に一枚撮るぜ。オレも思いがけず楽しかった」

こうして珍妙な出会いの思い出が保存される。美穂子は少しずつ携帯電話のメール機能を扱えるように努力をした。上手く出来ず失敗も多かったが、一切それを苦に思うことはなかった。

美穂子は今日もあの日から変わったディスプレイを見て微笑む。

驚いて目を丸くしている可愛い後輩と、中心の人懐こい笑みの優しくて大胆な男子。

そして抱きしめられてはにかみながらも幸せそうに微笑む自分を。

牌譜2：『兆し』（後書き）

和了

【二二三三四五五六六七七八・四】

成立役

●門前自摸：1翻

他家の捨て牌を使わず、全て自摸で集める。

●断么九：1翻

么九牌を使わない。数牌の2～8だけ。食い断么九でも成立。

●平和：1翻

門前役。役牌と刻子がない両面待ちの役。

二三の塔子に一四の両面待ち。

●両盃口：3翻

門前役。2種類の順子を2組揃える。

八八を雀頭とすると、二三四と五六七が2組。

●清一色：6翻

副露で5翻。一種類の数牌で作成。

今回は萬子のみ。

●大数隣：ローカル役満

萬子の2～8を2枚ずつ揃える。筒子では大車輪、索子では大竹林と呼ばれる。非常に難しい形である。

難しいが、あり得る役ならば使いますが、特に『九蓮宝燈』のよう
な奇跡的な役は使いません。
大数隣の形も危険域ですが、初回なので使いました。

牌譜3：『麻雀部』（前書き）

この小説に過度な役満はありませんが、多少都合の良い展開が含まれています。

麻雀の自摸の確率や人間関係の方面です。

一応、翻と翻に違いはないので誤字ではありません。

一言：京太郎だってヒロインになれるはず！
ガチにBLはありません。

感想ありがとうございます。

牌譜3：『麻雀部』

たっぷり睡眠8時間。心にゆとりのある通学計画。

今日は絶対に乗り過ごさない、と意気込む少年は座席で眠気覚ましの栄養ドリンクの空ビンを握っている。

- -今日は負けんぞ電車め。どうにか清澄付近に引っ越しか下宿できないか。いや、むしろ学校に。保健室からなら通学楽なんだが。

駅に着いても了はそうだった簡単そうで難しく虚しい問題に悶々としながら公共の駐輪場に向かう。

県内の長閑な地帯で見掛けたよぼよぼなゲートボールの如くゆっくり回っていた車輪が、ある人物が視界に入った瞬間に豹変する。

音のドップラー効果がはつきりと分かる程の速さで突き抜ける。必死にペダルを踏む暴走野郎は、その実トラウマからの逃走のために馬車馬の様にひたすら働く百万馬力である。

一気に200mをドリフトしながら無事故で走った了は、敵地へ潜入するスパイに似た心境で清澄高校へ向かう。

携帯電話の電源は切られており、ホラー映画でなければ屍のように反応はない筈だ。万全の対策を誇らしげに、昨日とは違って男子の制服の黒色が混じった1・Bの教室に入った。

「お、上埜。昨日はどうしたんだよ」

入学式以来隣の席になった金髪の少年である。学ランの第一ボタンを外し、整った顔立ちに高身長に備わる細さと長さを揃えた足で、明るい印象的な少年だ。

「京ちゃんか、おはよー。昨日は出席して授業は受けていたんだがな、登校する学校を間違えたんだ」

入学式後の自己紹介からはこの須賀京太郎をあだ名で呼んでいる。微妙な顔をしていた京太郎も既に馴れてきている。

「学校の間違って、お前な……」

「仕方ないから風越で授業を受けていた」

「そこ女子校じゃねーか！……ここは羨ましいのか？だが肩身が狭いような」

端から見た天国は実は苦境だったりもする。女子校とはいうがこの年代の女子は恐ろしい程に強いのだ。クラスの総意による迫害や拒絶を受けるとすればトラウマ級の悲劇にも成り得る。

「美少女とも仲良くなったぞ。ほれ」

京太郎両側に少女を抱き寄せて撮った写メを見せた。

「確実に天国だったのかよチクショー」

京太郎は無駄に心配したことでも、女子校一日体験ができなかったことにも思いを込めている。

「それにしても京ちゃんの雰囲気が変わった気がするな」

「そうか？」

「ああ。例えるなら村人Aから、布の服と檜の棒を装備した無職」
V・1」

微妙な比喻表現に、京太郎はこめかみ辺りを揉む。

「我輩は京太郎である。まだ手に職はない」

「いい加減止めんか！」

ふざけた態度の了に京太郎のチョップが軽く当てられた。

「麻雀初心者によくある匂いさ」

「え、もしかして上埜って麻雀出来るのか？」

京太郎の何気無い単純な質問に対して、了の眼が一瞬輝いた。悪寒が走った瞬間京太郎の顎が了の手で上げられた。

「何だ京太郎、オレの事が知りたいのか？なら、後でその身体にたっぷりと教えてやるよ」

京太郎を口説くような了の仕草や口調に女子が色めく。

「ま、待て待て待て！何か危なげな空気になってないか！？つーか女子の目が怖い！」

「大丈夫だ。女子は了×京を妄想しているだけだ」

「掛けるって何！？」

余裕な態度の了と対照的に落ち着きのない京太郎。結局曖昧なまま授業が進み、放課後となる。京太郎は了に話し掛けようとすると女子の視線が集中するため、恐縮していた。

部活のために向かった旧校舎の屋根裏。京太郎が扉を開くと其処には、うちひしがれている少年がいました。

「ぶ、部長？何があつたんですか？」

少年、了の対面で頭を押さえていた久に訊ねる。今朝のやり取りの関連での疑問はやや確信に近づいている。

「コレ、私の従弟なのよね。そうね、須賀君はしばらく了に麻雀教えてもらうといいわ」

見るからに疲労感たつぷりの久は、暫く寝るらしく備え付けのベッドに向かった。

「何があつたんだ？上埜」

かなり有名な3文字のアスキーアートで表現できそうな体勢の了に仕方なく話し掛ける。ほぼ確実に下らないであろうが、他にすることがないのだ。

「久姉に、久姉に一週間抱き着けないんだ」

思いつきり小突きたくなる衝動を抑えられた京太郎は、当に善人である。

「確かに昨日待たせた上に、今朝逃げてたけどさ」

酒が入っているかのような悲しみの吐露。それを聞きながらも京太郎は1人の男子として制裁した方が世のためになるのではないかと考えている。

「この広い世界に存在する、まだ見ぬ美少女を求めて何が悪い！男は誰だって開拓者なんだ！ロマンを求めて冒険してるんだ！」

共感してしまいそうになる言葉に京太郎自身、どうしようもない気持ちに駆られる。一方で久はアイマスクに耳栓で完全防御型のアイアンメイデンとして毛布を被っていた。

「正直に言おう。オレの眼には麻雀スカウターが備わっている。麻雀女子であれば、美少女サーチが可能なのだよ」

「な、ナンダッター！」

「良い機会だ。見ているがいい」

了はそのまま部室の入り口に向かった。そして、内側に扉を引くとタイミングを謀ったかのようにバランスを崩した少女が了にぶつかる。突然押し倒す形になるが、了は少女を抱きしめて自らをクッションにした。

少女には突然の出来事であり、驚いている。

「ふふ、大胆なお嬢さんだな」

「す、すみません！直ぐに離れますから」

少女は一瞬で顔が赤くなった。しかし少女の後ろに回った腕が離脱を拒んでいる。

「は、離してください」

「む、済まない。可愛くて抱き心地が良いものだからな」

少女は了の回していた両手を離して悪戯っぽく笑いながら、右手で頬を撫でる、糖分濃度の高い行動に顔も思考も茹で騰がる。

「む、固まったか。ベッドは塞がってるから……仕方ないな。ああ、仕方ない」

企みは終わらない。既に立ち直ってるし、確かに絵にはなるが直前までの言動からもげるとか爆発しろ、と京太郎は思っていた

それから約5分後、京太郎へ牌の種類と面子と対子について教えた所で少女が正気に戻る。

「私は一体何を……」

少女にはまず、対面で牌を弄って並べている京太郎が見えた。自らを支える腕を辿った先にいた了を見て一気に赤面した。了が少女を抱きながら支えていたのだ。

「ベッドには先客がいてな、椅子は少し固くて体勢も辛いと思ってな」

腕の拘束が外れた少女は大人しく了の上から降りる。

「介抱していただきありがとうございます。私は1年の原村和です」

恥ずかしさに和は視線をさ迷わせながら名前を告げた。

「オレは同じ1年の上埜了。備考として部長の竹井久の従弟ね」

新入部員はもう一人、和の友人がいるのだが、今は食堂に寄っているらしい。人数は足りないが、京太郎に馴れさせるために3面での麻雀をすることになる。時間的に東場のみならできるかもしれない。

「3人で、ですか？」

公式ではないが3人での対局はルールが異なる。王牌調整のために萬子の2から8までの28枚を除く、といったことなどが、自動卓なので王牌を増やすことで収まる。加えて点数計算の際に親は本来の3分の2、子は本来の2分の1とし、ウマやオカ等の順位得点は不採用となっている。

「変則的な3人麻雀を変則的なルールです。河に切られる牌が減り、不可侵たる王牌が増えるから理論、デジタル打ちの練習になるな」

「それは……意外と面白そうです」

和のやる気が増加した所で意識が対局に向かう。京太郎が現在覚えている役は、立直と平和、加えて変則的な形の七対子と国士無双である。仕方なく、京太郎は役の一覧表を片手に対局となる。

「役を覚えるだけじゃ、麻雀で勝つことはできない。他家の進み具

合、いつ駆けに出るか、引き際はどこなのか……これは実際打ちながらの理解が一番早いな」

最初の親は和となる。南に京太郎、北が了となっている。通常では牌が残り15枚となった時のツモが海底牌となるのだが、今回は3人の対局であるため更に18枚余分に残すことになる。

「もう一度確認するが、チーはオレのみ不可。王牌は更に18枚増やす」

確認を終えた所で配牌が始まる。

- - 【二三九1368参参南西發中】

今後の狙い次第、微妙だな。

四向聴は酷く悪いわけではないが、今の了の持つ牌では安い和了しかできない。しかし、上がらずとも聴牌を作ることにも意味はある。特に初見相手ならば打牌の癖を掴むことを集中的にできる。

余程特徴的な手牌でなければ、作りやすい役である断么九と平和を骨格に組むことが多い。

次点としては鳴いた場合の食い下がりがない対々和を骨格とした役

トイトイホー

タンヤオ

ピンフ

だろう。

例外で意外性と攪乱目的の亜空間殺法、通称で亜空間と呼ばれる鳴き芸がある。無意味な副露で混乱させるだけなのだが、形だけでは聴牌を作ることができるため流局時にのみ利点がある。

了としては鳴き芸より泣きゲーの方が圧倒的に好きである。

「リーチです」

8順を終えた所で、和が動いた。河には

【南1八伍南1参2】

があり、新たに7筒が捨てられた。ドラは5萬である。

京太郎が7筒で降り、了も8萬で降りた。10順目に入った現在、了の手牌は

【二三四九1236参参發發發】

であり、役牌所有状態で一向聴となっている。

・三色も視野に入れていたが、最悪『發のみ』とか。

了は么九牌や順子、刻子などの個性が主張し合い譲らない手牌に肩を落としながら、直撃されないように打牌していく。京太郎は一度ポンをしていたが、それは自風ですらない北である。しかも一枚目の北への副露で、和からは呆れたような視線が送られていた。

「ツモです」

【七八九七八九漆漆捌捌玖西西・玖】

「リーチツモ三色平和チャンタイーペイ。8翻は倍満。8000才
ール」

・こいつぁ……。序盤の1筒捨てはミスだが、巧いな。

30000点から返し点なしなのでと京太郎は22000に減った。一本場に入り、和の容赦ない和了に了も一層真剣になる。

牌譜3：『麻雀部』（後書き）

今回の和の和了

【七八九???77889西西・9】

立直門前自摸三色同順平和全帯么九一盃口。

8 翻。

倍満。

●立直

1 翻役。いわゆる聴牌宣言。

●門前自摸

1 翻役。役を自摸のみで揃える。

●三色同順

2 翻役。3 種類の数牌で同じ数を使った順子を作る。副露では1 翻に下がる。

●平和

1 翻役。役牌を含まず、順子の両面待ちでの和了。

●全帯么九

2 翻役。字牌と么九牌を含んだ面子で作る。副露では1 翻になる。

●一盃口

全く同じ順子が2つ。副露では役が不成立。

今回の和のミス。

字牌を使わずに作る全帯么九は上位役の純正全帯么九となり、3 翻として数えられるため、役牌でもドラでもない西ではなく1 筒を雀頭にすべきだった。

修正 2
0
1
1
/
0
1
/
0
4

牌譜4：『共鳴スル鸞鳳』（前書き）

優希にだって旗が……

牌譜4：『共鳴スル鸞鳳』

最初からいきなりの倍満となり、和が親だったため連荘の東一局一本場となる。組み立ては自動車により即座に混ぜられ、出来上がった山からの配牌が終わる。

一本場は全員が聴牌のまま流局した。筋を見るからに、京太郎は高確率で安牌な牌を恐る恐る切っていたが。

一本場や二本場は、目印に親が100点棒を1本ずつ増やして置いていく。100点棒が一本につき、和了時の点数が300点増えるようになる。

開始時の手牌は

【三四九1336899式伍西】

ドラは萬子の8で、雀頭1つと塔子のみ。幾つかの方向性が定まり、不要な牌が見えてくる。

1順で自摸した牌は筒子の7。続けて索子の1を切る。河には和が切った西もあつたが、全員にとって役牌とまらない風牌で、順子の形がないので『一発』回避のための安牌として確保している。

他家としては自摸での進みが滞っているようで、了は3順前に西を捨てたが、未だに均衡している。了は筒子の5を自摸し、形としては一向聴になった。

「ポン」

京太郎が和の發をポンした。役牌の明刻は連荘を狙う親にとっては厄介な存在である。今回の京太郎の捨て牌には筒子と索子が多い。

「むう」

小さく唸った了は自摸した牌を加え、索子の5を捨てた。和は所要時間はほとんど変わらないが当たらないよう慎重に牌を捨てていき、京太郎は手を進めることに集中する。

「京ちゃんを撃墜。チンイツイーペー」

【1 1 2 3 3 3 4 5 6 7 8 9 9 ・ 2】

清一色一盃口による7翻の跳満。一気通貫も狙えただろうが、それをしなかったのは牌の残量と役牌を伴う京太郎の進み具合が油断な

らなかったことが大きく、先程唸ったのは本来狙っていた役から離れてしまったからである。

こうして二本場は了が跳満を京太郎に直撃させた。今度は京太郎が親になった。ルールやコツが掴めてきたのか、点数は芳しくないが表情は冴えている。

- - 【一三六七248玖東南南西發】

バラけたな。幺九牌は6種類、九種九牌すらできねえな。ドラの6萬が1枚。

了は自摸した8索を加え、いきなりドラの6萬を切った。続いて發を切り、それからの捨て牌は萬子を中心に増えていった。

- - 他家に染めの気配はない。役牌は中以外は2枚捨てられている。老頭牌も出たな。

对象的に了の手牌のほとんどは幺九牌である。対子が多いため『国士無双』には無理がある。『字一色』も發を捨てた時点で狙っていないだろう。ここから聴牌しても立直や門前自摸でしか和了できない酷い揃え方である。

「じゃあ！張ったぜ！リーチ」

10 順目に京太郎がリーチを掛けた。字牌待ちはなさそうだが、ほぼバラバラで筋でも読みにくい。

京太郎の河にある数牌は萬子の189、の筒子の26、索子の79。筒子が比較的狙いやすい程度である。焦りの色無く了は南を2回続けて捨てた。

「よし、ツモ！」

初心者にはたまに自摸和了の牌を混ぜてしまいが、京太郎は右側に添えて牌を開示することができた。

【三四五五六七八八式参陸漆捌・肆】

「リーチツモタンピンドラ1……裏ドラは乗らなかった」

門前自摸立直平和断么九ドラ1の親満貫である。調子が出てきた直後の一本場で和に満貫を当てられたが。

東風最後、経過時間的にオラスにも丁度良い所で親となった了は、手牌を確認してすぐにため息が出た。

「誰か……来る」

了の呟きの直後、扉が勢い良く押し開けられた。

「つどーん！タコス買ってきたじえー！」

扉を開けたのはタコスを持つ小柄なわんぱく少女であった。性格では静かな和と逆、体型、特にある一部分が極度に真逆な少女である。

「3人でやるなんてせっかちだじえー」

この少女はタコスを頂点に、名前にタコが付く物を好む。名前は片岡優希で和の中学からの友人である。

「面子揃ったが、この局はどうする？できれば止めておきたいんだがな」

「新入りがいるじょ！？」

「それならこれをオーラスにしましょう。配牌後で、キリもいいですから」

今更に驚く優希は無視され、少し考えてから和が言った。3人ではあるが、中途に終了するよりも東風のみでも終わらせた方が安定したデータになるからだ。

「うーん。分かった。だが、親和了でもオーラスにするからな」

今回のドラは9索で、了はドラ隣の8索を捨てる。続いて和が北、京太郎が1筒を捨てていく。

「ポン」

- - 最初の8索捨て。そして1筒を一枚目からポン。么九牌の関係ない染め手かしら？

1順目からの積極的な副露。しかしながら和は、配牌後に全く乗りがでなかった了なのだから、それほど高い役になりそうにはないと感じているため、驚いた気持ちを仕切り直して2萬が切られると即座に自摸動作に入った。

和は最も得意なデジタル打ち。目下の移行を理論的に、合理的に、残りの牌を計算する筈が、オカルト染みた警鐘にヒリヒリする右手は本能的に何かを警戒している。

「……カン」

和の意識と思考が外れていたのは、ほんの数秒間。ハツとした時には了が加槓により4枚目の1筒を明刻に加えた。

「……ふう」

嶺上牌を見てのため息。入ったことから扱いが微妙な牌の可能性もある。代わりに3索が捨てられた。

2枚目のドラは1萬である。微妙にずれた計算を修正しながらも和が捨てた牌は1索である。

「ん。カン」

わざわざ暗刻子を使用しての大明槓。確かにドラは増える利点はあるが、それは面子を晒すことでもあるのだ。

東が切られ、捲られた王牌により4筒子がドラとなる。了にダブル東の芽がないことに若干の安堵を覚えた。

「んー。よく寝たわあ」

説教をしているうちに一時的な効果しか得られない徒勞に気付き、
今までの疲労を自覚したため寝ていた久である。

「あ、部長起きたんスね」

「お疲れ様です」

「お寝坊さんだじえ！」

久はそれぞれに適当に返事を返し、了の揃えている牌を見た。

「へえ。珍しく『ソレ』狙うんだ」

感心したように久が呟き、その言葉は同時に形が整ってきていること
とも示唆している。そして了に捨てられている牌は僅か5枚という
速さもある。

「まあ、『鳥』を狙うのは気紛れだな」

了の言う『鳥』が和には分からなかった。ただ、槇子の1索ではな

い何かを感じていた。和の打ち筋は変わらず、即座に9筒を切った。

「ポン」

- - まさかこれは老頭牌狙い？幺九牌には注意が必要ですね。

了は既に3副露している。残りの4枚が既に聴牌の可能性も低くないため、ここで急ぐことは蛮勇と同意である。

- - 西。須賀君が1枚出してますが、これは条件が悪いですね。

和は西ではなく、4索を切る。了が動かないことに安堵した。実際、了の実力は測りかねている。印象的な和了もなく捨てる牌もただ無難なだけに思えたが、噛み合わない何かがあった。

もし西待ちならば、何れ程の確率となるか。現状でツモの確率はそれなりだが、了しか和了できないということでもない。

和から見て使われそうな幺九牌は、1萬と9萬と西である。特に1萬は只でさえドラが付く上に『三色同刻』が増えてしまう。和は1萬切りは最悪手として考慮から外している。それでも逃れられない運命の渦に絡めとられる。

「『鸞鳳斉鳴・ランフォンチーミン』悪いな。ツモだ」

【一一一西・1111999式式式・西】
三色同刻対々和混老頭ドラ3

「9翻つーことで親倍満だ」

オース終了の結果として、京太郎は最下位だったが整った和了や対局の流れの理解が捗り、2位の和も少人数での麻雀という未知の体験ができた。

「久姉！勝ったから……」

「お仕置きの取り消しはないわよ」

要求を満足に言うことすらできず、認可もされなかったための部屋でキノコのような存在となる。

「ぶちよー、あの新人り誰だじょ？変な麻雀でだけどのどちゃんに勝ってるし」

タコスを食べながら観戦していた優希が訊ねる。先ずは端的に和た

ちと同じような情報が説明された。

「それと私が麻雀始めたのも了が切っ掛けよ」

「上埜の幼少か……イメージできねえな」

想像を一瞬で打ち切る京太郎。現在の了のインパクトが濃いためである。

「勿論あんな性格じゃなかったわよ？一言で現せば『ツンだれ』ね」

「ツンだれって何だじえ？」

「成分的にツンデレ4割と無気力6割ね。了は九州にいたんだけど夏休みとかお正月に家に来てたのよ」

九州にある了の母方の実家で祖父母と暮らしていた。了の両親は現在国内外問わずの活動で定住しておらず、手紙と共に珍妙な土産が届く。

「小学校に入ったばかりの頃、九州に行った時に了が麻雀を教えてくれたから本格的に始めたのよね」

「上埜君はその頃にはもう麻雀をしていたんですね……」

懐かしみながら言う久に、和は予想以上に経験者だった了に感心する。キノコが復活していなければ話はここで終わっていただろう。

「おやおや？和、オレの昔話も良いが……お前のことも知りたいなあ」

和の背中に感じた重みと耳元で囁かれた甘いセリフ。いきなりのことで驚くも身体は一切動かず、抱き締められている現実顔が紅くなっていた。

「待つじょ！のどちゃんは私の嫁だじえ！」

「嫁？甘いな。そんな言葉で止まれるほど……、オレの漢力 おとこりよく は低くない！」

了は左手はそのままに、右手で優希を指差す。優希もこの寸劇に入り込んでいるため、反論が飛ぶ。

「のどちゃんのおっぱいは譲らないじえ」

「確かにその決意は素晴らしいものだ。だがな、和を守るだけじゃダメなんだ」

勢いが減衰し、調子が変わる。故に印象が付けられ優希の興味が向いた。

「どういうことだじょ？」

「和を守るために矢面立つ、お前が傷付くだろう？」

大事なことは和のことだけではなかった。優希自身が傷付けば和の心も傷付くことに気付かされる。

「だから一緒に和を守ろう。そしてオレはお前も守る」

「わ、私は今、猛烈に青春してるじょー！」

和を左腕に抱いた了に優希が飛び込む。早すぎる展開に置いていかれた京太郎と、見馴れすぎた了の言動に頭を押さえる久、話題の中心なのに発言できずにいた和、それぞれの心境は重なっていた。

（何でこつなっ たんだろっ?）

密度の高い幾つかのイベントの結果、和の心労が増した1日である。

牌譜4：『共鳴スル鸞鳳』（後書き）

京太郎の和了

【三四五五六七??23678・4】

立直門前自摸平和断么九ドラ

●立直

聴牌宣言。

●門前自摸

副露せずに自摸和了。

●平和

役牌以外の雀頭と順子の両面待ち。塔子の23の端の1か4のどちらかで和了。

●断么九

么九牌を含まない和了。

●ドラ

今回は6萬。翻は増えるが、役ではない。

了の和了

【?????????????????・?】

清一色一盃口

●清一色

一種類の数牌だけ。筒子のみ。

●一盃口

今回は????????で成立。????が2つ。

【一一一西・????????11111・西】

三色同刻対々和混老頭ドラ3

●三色同刻

同じ数を表す数牌で刻子を3つ作る。――と?????と1111。

- 対々和

対子1つと刻子4つ。槓子も刻子に含む。

- 混老頭

老頭牌と字牌しか使わない。西ではなく9萬か9索を使っていれば『清老頭』という役満となっていた。

- ドラ

今回は槓によって増えたドラが乗った。

- 鸞鳳齊鳴

対々和の別名称。どちらかというと対々和が別名でもある。

花鳥風月の『鳥』の部分。

牌譜5：『ランチタイム』（前書き）

原作突入？

いえいえそんなことは……

ふっ

嶺上・さつきゆん・開花

感想、意見、アドバイスがとつございました。

今回は短めなのでそのうち連投します。

牌譜5：『ランチタイム』

その日は必然的に、7分の1の確率で現れるあいつがやって来た。そいつが来ると午後から学生は喜ぶ。奴の名は土曜日。半ドンという呼び方まで存在するのだが、うなぎの丑の日とは関係がないらしい。

土曜日は偉大だ。何故ならこれが正曜日だったら国際問題になりかねなかったのだから、やはり誰が何と言おうとも偉大なのだ。

その喜ばしい土曜日効果からか、授業中に小舟で海原へ向かう生徒は減少傾向にある。それは決して、脳天に突き刺さるチョークは原因ではない。

「なー。京ちゃんは昼飯どうするんだ？」

中学二年辺りからそここのアパートで一人暮らしを始めている了ではあるが、やはり料理は面倒なのだ。毎朝起こしに来るような幼なじみも九州から越してきた了には存在せず、甲斐甲斐しくも世話を焼いてくれるような彼女もない。家事の象徴、万能女神たるメ

イドの代わりにあるのはスフィックスの置物とかハブのぬいぐるみといった両親からのお土産ぐらいだ。

「ああ、今日は学食かな。日替わりレディースランチが旨そうなんだよね」

「その行動にトレース・オンする方向で」

了は京太郎に便乗する。もし昼食が家であつたとしても旧作RPGのように密着ストーキングをして『憑いて』いったらう。

しかし問題は別の方向で発生していた。レディースランチは名前の通り女性限定である。京太郎が実は男装している少女であつたといった事実でもなければ、当に難易度Aランク超の任務となるのではないだろうか。

「うおーい、咲ー！」

高難度の任務であろうと、意外な所に突破口はあるのだ。京太郎が呼んだのは大人しそうな文学少女である。そして了にはその少女に見覚えがありすぎた。

「京ちゃん、と上埜君？」

この宮永咲という少女からしても、了の印象は強いのだ。第一印象からしても、普段の行動にしても。

「京ちゃん、もしかしてだが、知り合いとか寧ろ同じ中学だとか更には幼なじみだったりするのかな？」

咲に聞こえない程度に京太郎に訊ねる。その様子は興奮というよりは、右往左往しているような困惑に近い。

「うお！？ま、確かに中学では咲と同じクラスだったけど……どうかしたのか？」

京太郎はその気落ちした、若干ではあるが深刻そうな様子に対応して声音が下がり慎重になる。

「初めて会った時なんだが、正面から20秒くらい『むゆゆう』って唸ってしまつてな。正直自分でもどうしようもない思い出が出来てしまつたんだ」

全く以て無用な心配であり、京太郎は杞憂という言葉にも当て嵌めたくないような気恥ずかしい感覚に見舞われる。

「なら、自己紹介でもして互いに水に流せばいいんじゃないか？」

「む、さすが京ちゃん。『上埜了認定！意外に福神漬けが似合う男ランキング』のベスト5に入るだけはあるな」

知らない内にランキングに認定されていた京太郎からのアドバイスを実践。了は過去などない、初対面として挨拶をする。本人は政治家的二枚舌という偏見に直球なネーミングの技術を駆使し、見事に咲を丸め込むことに成功したのだった。

「咲ちゃんは本が好きみたいだな？」

教室でも空き時間に本を読んでいる姿を度々見掛けているし、今もハードカバーの本を持っている。

「あ、はい。小説の……恋愛小説が好きなんですけど」

「楽に話してくれていいぞ。恋愛小説、か。可愛い娘だな、もう」

「は、はひ。か、可愛いだなんて、ウソですよ」

免疫のない咲の初々しい反応がかえって了を刺激してしまう。

「つい触りたくなるような柔らかい髪も。澄んだ色の理知的な瞳も。瑞々しい、ほんのり紅い頬も。どれもが可愛らしいよ、謙虚なお姫様」

顔を近付け、やや上から見詰める。右手は咲の顎を軽く上げるように添え、左手は腰に優しく添える。それを白昼の学校で堂々で行える胆力を誉めていいのか。

「へあうう？」

「おま……またか」

京太郎が呆れる端で、咲は和と同じく思考回路がショートし、了はその反応を更に楽しみ、そのまま固まった咲を仰向けにして持ち上げる。

「ほーら、お姫様抱っこだぞ」

「ひひやう！え、えう？わた、私は……あうあ？」

回らない呂律と回りすぎた思考により明確に発音が出来ず、視覚的情報も上手く処理出来ない。

「色々と心境が複雑すぎてコメントに困るけど、取り敢えず学食行かない？」

結局京太郎は直視した問題を、見なかったことにして先送り、軽度の現実逃避をした。

「レディースランチ1つ」

学食で咲がレディースランチを注文している。無論、京太郎に頼まれたからであるのだが、道中の出来事の熱が冷めず、少し紅潮していた。

代わりに咲の昼食は了が注文している。京太郎は席の確保を、土曜日という部活動に関係のない生徒がいない分余裕がありすぎる状況で全うしている。

「はい、京ちゃん」

「お！サンキュ」

高校男児には若干ポリウム少な目ではあるが、体育会系ではない京太郎には丁度良い分量である。

「買ってきたぞ。『青春メニュー』のカップルランチ」

対面に座った了が持ってきたのは基本的には、あつさりした健康的な料理で構成されている。しかし、注目される所は咲のプレートと了のプレートの間に置かれたジューズにあった。

「ん？これは1杯の飲み物を2人で共有し、正面から見つめ合いながら飲む、限定メニューの1つだ」

説明を聞いた咲の喉が鳴る。咲は嫌悪感がないことにハツとなる。事実に若干美化された想像やいつ飲めば自然に感じられるかの予測も立てていた。

京太郎はレディースランチが予想通り美味しかったことで喜び、了が女子といちゃついている燦々たる事実には血涙しそうになったりし

ていた。

満足気な了と恥ずかしがりながらも積極性のある咲も料理の質は高かった。更に、血涙に耐えていた京太郎にジューズを見つめ合いながら飲む光景の写メを撮らせていたのだから質が悪い。

それから3人で遊びに繰り出すこともなく、了と咲がメールアドレスの交換を終えた所でそれぞれの帰路に就いたのだった。

牌譜5：『ランチタイム』（後書き）

今回は麻雀なかったため、店仕舞いです。閉店です。

またのお越しを。

しかしここにて制作秘話・裏話！

そ、そんなバカな……

『敵はいたくぜ』を並べ替えると
『ぜいたくは敵だ』になるだど！？

つてのが由来の作者名という裏話。

文通履歴：1（前書き）

連投。

文通履歴：1

4月×日

- - - Sending

To: Mihoko

件名：

添付ファイル：

20××04××.jpg

本文

メインは今日撮った写メの添付な。保存しててくれたら嬉しい。
華菜ちゃんにも送っとく。

- - - Receiving

From: Mihoko

件名：

ありがとうたいせ

本文：

ありがとうたいせつにするわ

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : K a n a

件名：

本文：

ちよつとだけ見直したし。……ありがと。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : M a k o

件名：

本文：

放課後の久は怖かった。明日は精々氣い付けるんじゃない。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : H i s a

件名：

麻雀部

本文：

今日はどうしたのかしら？取り敢えず、明日会ったら……ふふふふ。

4月×日

- - - S e n d i n g

T o : M i h o k o

件名：

入部した

本文：

昨日麻雀部に入部するはずだったんだが、電車で寝過ごしてな。でも、みほちゃんが居てくれて楽しかった。ちよつとお仕置きされたけど……。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : M i h o k o

件名：

本文：

たいへんだつたのね

- - - S e n d i n g

T o : N o d o k a

件名：

本文：

登録された名前の漢字見て気付いたけど、組み合わせたら和了
ーラ になるな。

それにしても和ちゃんの抱き心地は良いな。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : N o d o k a

件名：

本文：

確かに『和了』になりますね。だからといって抱き付かれるのは困
ります。上埜君のことが嫌いという訳ではないのですが……

- - - R e c e i v i n g

F r o m : M o m o k o

件名：

暇っス

本文：

何でこの学区から清澄行ったんすか？そのうち家宅査察に行くん
で片付けしとくといっすよ？

あ、勿論Hな本も探すんで。

- - - S e n d i n g

T o : M o m o k o

件名：

本文：

来るなら直前に連絡ぐらいはしろよ？鍵は渡してあるから別に家捜しならいいが、オレのロマン派な趣向は多岐に渡るから覚悟しとけ。清澄に入ったのは従姉に呼ばれたから。それに学力的に大きな差はないからな。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : K y o t a r o

件名：

本文：

今日は改めて麻雀が面白いと思った。と言ってもまだ2日目なんだけどな。最後の上埜の指導も解りやすかった。サンキュな。

- - - S e n d i n g

T o : K y o t a r o

件名：

呼び方は『了』でいいぞ

本文：

最初は自由に打って揃え方の把握。次は理論的に打ってある程度残りの牌を把握できるようにする。最後は感覚と理論を織り混ぜて自分の打ち方にする。

京ちゃんは理論の比重を重くするタイプかな。今は見習いLv・2つととこ。ニートの時代は終わった。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : K y o t a r o

件名：

本文：

最後は意味分からん。自分だけの打ち方か。今はそれを目標にする……前に『役』覚えなきゃな。明日からもよろしくな、了。

- - - S e n d i n g

T o : K a n a

件名：

本文：

みほちゃんが頑張ってメールを打ってくれた。少し大変そうだからフ

オロー頼む。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : K a n a

件名：

本文：

そのくらいなら言われなくても。了の為にする訳じゃないから、
このところ忘れんなし！

- - - S e n d i n g

T o : K a n a

件名：

本文：

見事なまでのツンデレ文章ごちそうなまっす。

4月×日

- - - S e n d i n g

T o : S a k i

件名：

添付ファイル：

20××04××.jpg

本文：

当に今日の思い出。保存しててくれると嬉しい。
林檎みたいに紅くなってるけど、これは林檎より甘い禁断の果実だな。

- - Receiving

From: Saki

件名：今日のこと

本文：

うう。すごく恥ずかしかったんだよ？特に廊下のアレみたいなのはダメだからね！
でも、今日は楽しかったかな。

禁断の果実は、やっぱり恥ずかしいよう。

- - Receiving

From: Momoko

件名：

本文：

来週の土曜日に決めたっす。紅茶持つてくんで

ケーキ！

お茶請け

ケーキ！

は何でも良いんで任せるっす。あ、お饅ケーキ！頭とかでいいっすから。

- - - S e n d i n g

T o : M o m o k o

件名：りょーかい

本文：

前提として荒らさなければ。お茶請けは任せる。『10円チョコ』と『うま味棒』を厳選してくる。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : M o m o k o

件名：

本文：

それは待つつす！まさか刷り込みを使った然り気無い高等な目論見

が効かないなんて……

先生、ケーキが食べたいっす。

- - - S e n d i n g

T o : M o m o k o

件名：

本文：

変なところで見栄張るなっつての。ケーキは買っとく。
その後はどうする？またカラオケにでも行くか？

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : M o m o k o

件名：

本文：

カラオケデートもいいっすけど、了の部屋でゆっくりするっす。

文通履歴：1（後書き）

『隠れ』キャラ有り

麻雀安牌思索／流局（前書き）

本編の進行具合。

- 龍門渚
 - 風越
 - 家宅訪問
- を並列作成。

次投稿の文章はできていますが、整合性調整のために1話ストックする方向なので、もうしばらくお待ちください。

麻雀安牌思索／流局

「ここからはステルスモモの独壇場ですよ」

〈追記的説明〉

●刻子と槓子の明暗

明暗とは副露、つまり他家の捨て牌を利用したかどうかで決まります。

明刻子・明槓子は副露を含む面子であり、副露によって明確に場に出されます。暗刻子・暗槓子は自ら集めたもので、他家からは不明瞭な面子となります。

しかしながら暗槓子は場に晒すじゃないか、と意見が出そうですが、暗槓の際に牌を見せないで4枚伏せていたことからの習わしとします。

それが正しい語源かは分かりませんが、国士無双であれば暗槓からの搶槓が認められるルールもあるのでどちらにせよ晒されます。

●搶槓

明槓された牌が待ちだった場合和了できる。一般的には明槓のみなのだが、明槓の発生は2種類ある。

ポンした牌と同じ自摸牌を加える小明槓の『加カン』

暗刻子を持った状態でのカンが大明槓という。

ポンやカンよりもロンが優先されるため、大明槓ではロンを取るのでは？

結論としてはどちらもできる。

加カンからの搶槓の説明は省くとし、大明槓に対する搶槓の簡単な例は、役が成立しない沖和 チヨンボ の時が分かりやすい。

立直の場合は『振りテン』となるが、そうでなければ直撃相手の選択肢が増える。低い点の家より、高得点を所持した家から減らした方が有利になることもある。

カン無効ロンにするか搶槓するか戦略。

〔他家を考慮した戦略〕

勝つためには和了以上に他家の和了に振り込まないことが重要なのだ。複数家和了が認められていない限り、流局を除けば和了は4分の1の確率である。

連続して和了し続けることは困難であるため、減点に注意がいる。

河を見て、3枚もしくは4枚捨てられている牌を狙って和了する待ちならば変えるべきである。

しかし牌を集めるのは他家も同じである。河にある牌は積極的不要牌宣言なのだが、手牌に安牌がない状況はどうするのか。

● 牌筋

順子の待ちには、嵌張待ち・辺張待ち・両面待ちがある。捨て牌から危険牌を予測する。

両面待ち。嵌塔子からの両面。

数牌で57の嵌塔子があり、6があれば順子となる。ここで4が場合、6ではないため捨てるのは早計である。7を打てば36の両面待ちに変わる。これなら和了確率が上がるため立直もしやすい。

このことから打牌7があつた場合、36に注意をする。

手牌に257とあつた時、2が切られやすい。この形で4を自摸し、他の面子が揃ってきた場合、234と567両方を狙うより、345又は456の1つのみが必要となる。河に27があつた場合は46捨ては回避が無難となる。

違う両面待ちの出来上がり方の考慮。対子崩しの両面。

手牌に334があり、3の対子・刻子が34の塔子の選択肢があつた場合である。他の面子に3順子と対子があつたのなら3捨てで『平和』狙いにもできるのだ。

これは捨て牌の前後が当たりとなる両面待ちも考慮することになる。前述の7ならば、677又は778からの両面となり、5689が含まれる。

7のみに注目し、嵌塔子からの両面の36と対子崩しの両面の5689を警戒すれば『35689』以外の1247が切りやすい。

河の牌から危険な筋から遠い牌から捨てると比較的安全である。

嵌張待ち。

三色同順や一盃口、一気通貫を付けるための両面捨てと単独で距離が空いていた場合の捨て牌だ。

【123467789+面子+対子】があつた時、147捨てで聴牌となる。1か4なら58の両面待ち、7ならば5の嵌張待ちにな

る。一気通貫をつけるために場合によっては嵌張待ちにすることもあり得るのだ。

【137】【247】【357】

の7捨ての場合、それぞれの組み合わせから234となる。

両面と合わせれば7捨てからは1と7以外は危険、と思うかもしれないが、あくまでも他の捨て牌に合わせて考えた時の該当数なので、無理せず河にある牌を捨てる選択もあるのだ。

他にも河の数牌が2種類しかない、染め手も分かりやすい。

以上の要素を使い、敢えて必要牌を安牌に見えるように捨てることも戦略である。

●確定要素

もし河に4が既に2枚あり、自分の手牌に2枚あるとする。このことから4の刻子を作ることはできない。

他にも槓子や4枚切りがあればその牌は面子に含ませることができない。

3が4枚切られていれば『123』の順子は作れないため、1と2では対子と刻子しか作れない。それが序盤であるなら24の嵌塔子を早く崩すこともできる。

暗槓子を、可能な牌が使用頻度が高めの3〜7だった場合は特に、後半辺りにカンをすればそこから形を変えなければならない家もあるため不意を打つことができる。

么九牌も国士無双でなければ搶槓はないのだが、他家への影響は割りと少ない。

（流局）

『四風連打 スーファンレンタ 』

風牌の東南西北のうち、1種類を第1順で4枚出る。

『四槓散了・四槓数了 スーカンサンラ 』

1局の内、合計4回の槓がされた直後、和了がなかった場合に流局。
『九種九牌』

配牌直後の手牌に么九牌が9種類以上あった場合任意で流局にできる。任意なので不本意な手牌ではないのならば続行できる。

『四家立直』

全員が立直した状態。減点はないが、立直棒は場に残る。

麻雀安牌思索／流局（後書き）

花鳥風月はローカル役にありますが、タイトルの花鳥風月は主人公の打ち筋の比喩表現的象徴ですよ。
詳細はいつかまた。

牌譜6：『登龍の家』（前書き）

今回も麻雀なし。

並列作成の風越訪問と家宅潜入はそれぞれ1話の半分位は出来ました。

牌譜6：『登龍の家』

メイド。ハウスキーパー。家政婦。類似した3つの言葉。しかしながら、メイドという言葉は格が違う。男として、漢として了も例外ではなくメイドを優越種と認定するだろう。

ハウスキーパーは素朴で平凡。家政婦はサスペンス。了の偏見は置いておくとしても、多く広まっているメイドへの理想はトップ集団を走っているだろう。

自由の象徴であり鳩よりも平和を導く存在日曜日、少し遠出をしてショッピングモールに訪れた了は輝く光を見た。メイドの少女がいたのだ。しかも服に劣ってしまう『がっかり系』ではない。

メイド分野は広い。完璧主義、ドジっ娘、清楚、わんぱく等の人間性や容姿、オプション効果を含めればそれは謂わば宝箱のような感動がある。

真面目タイプ、クールロリ、露出が控えられたメイド服にリボンの付いたヘッドドレス、一瞬で判別を終えた了は当然のごとく接近す

る。

「ちょっと無理すぎたかなあ。でも萩原さんにわざわざ車回してもらったのも……」

メイド少女は買い物袋を懸命に運んでいた。見るからに重みのある袋は小柄な少女には酷である。

「少女よ、頑張り過ぎは身体に障るぞ？」

視線は有り余る程にあつたが、今回は直接声が掛かった。

「はあ。あの、ボクはこれから忙しいので」

「ナンパじゃあないからな？お近づきになれば、とかはあるにはあるが、本旨は手伝いだ」

初対面であり、少女も何度かあしらった経験があるのかどうかは定かではないが警戒されていた。重量級の袋を代わりに持つのだが、複雑そうな表情である。

「あー、そんなに心配ならこれを持っててくれ。一応写真付きの身

分証明な」

清澄高校の生徒手帳である。学生割引にも使えるため、普段から持ち歩いているのだ。

「疑ってた訳じゃなくて、不思議だったんだけどね。今日はキミの厚意に甘えさせてもらっよ」

少女は少し目を瞬かせ、可笑しそうに笑い、同時に警戒という距離感がなくなっていた。

「あ、それとボクは国広一。龍門渚の2年で、これでもキミの先輩だよ、上埜了君？」

「うむゆ？そこはかとなく感じるプレッシャーが怖いっすよーちん」

笑顔ではあるが、裏に何かを潜めているような気配がある。一の笑顔は年下であつた了に少女と呼ばれたことから引つ張られている。無論、同年代と比べてみると発育の遅れはさめざめと見せつけられるため自覚はあるが、刺激されても平気である訳ではないのだ。しかしここでは年上のプライドとして大人の余裕を見せておかなければならないのだ。

「まあ、いいよ。取り敢えず一ちゃんは辞めて。間抜けな感じがするから」

自己克己により消火に努め、脱力した後にあだ名の撤回だけは求めた。

「ダメだったか？そうか、なら『くにひろん』だな。うん、安心しろ。本人確認を通さずに登録した」

「ちょ、それもダメでしょ！絶対ダウト！」

「そんなものは悉くてやんでいだ、くにひろん」

「だーかーらー！」

一は感情豊かに反論するのだが、聞き流されてしまい第2のあだ名の撤回は出来なかった。

「はあ、はあ……もー疲れたよお」

短時間で肩で息をするほど動き、撤回させようと努めていた。根気負け、しかも相手はまともに戦わないのだから余計に質が悪い。

「気分転換にはなったか？」

「え？」

ふと呟かれた了の言葉だが、一の驚きを誘うには十分だった。

「在学しながら、メイドとして『働く』んだ。疲れもでるし、気も抜けないだろう？ 肉体的な疲労はオレにはどうしようもないが、精神的にだったら視点を変えれば減じることくらいならできるからな」

一を案じるような了の態度に見直したかのような反応をしていた。

「そこまでボクのことを……。で、本音の方は？」

「慌てるくにひろんとかすげー可愛い」

いわゆる建前なのだ。それを聞くと感動的でも何でもなくなるだろう。

「やっぱりボクのことバカにして……バカに……うう」

一は涙を堪えるが、最早決壊寸前である。そこまですると了は慌てる。確かに慌てる一は可愛らしかったが、追い詰めたり不愉快な気持ちにさせるのは全くの不本意なのだ。

「バカにしたとかじゃなくてだな。何と云うか、そう言っただけの気持ちもあつたよ、みたいな奴で、心配したことも決して出任せって訳じゃないんだ」

パニックに陥りながらも、おどおど弁解するが、未だに一は泣きそうである。もし、落ち着いて見ていれば対応も変わったのだが、余裕はなかった。

「荷物運んだら……あ、飴！そう、飴ちゃんあげるから！うう、今ならお煎餅も付けるから！」

「ぶふっ」

涙を堪えていた筈の一は堪えられずに笑った。そのまま爆笑まではしないが、抑えきれない笑いが吹き出していた。

「本当に泣くと思った？ボクはキミより年上だし、それなりに辛いこともあつたからね。それよりも『飴ちゃん』とか……ふふ、もう

不審者だよ?」

一の方が一枚上手だったようで、先程も女性の必殺秘技の泣き落としの1パターンである。彼女が意外に大人の女性であることを肝に命じ、『飴ちゃん』発言や涙に弱いことを使ってからかわれている内に1件の邸宅に着いた。

「ここだよ。了君、ありがとう。帰り道がすごく楽しかったよ」

「くにひろんが楽しかったならそれでいいさ」

美少女や美女との会話だけでは満足できるのだから単純なものだ。野球ならば9回裏2アウト凡フライであるのだがしかし、ここでのまま別れるということはなかった。

「はじめ、お客様ですの?」

毅然とした立ち振舞いに腰に届く程の金髪が似合っている。見た目では恐らく高校生の少女である。

「あ、透華様。彼は道中荷物を運搬して下さった方です。自分の仕事でしたが、予想外に遅くなってしまいそうだったので、独断で依頼させていただきました。申し訳ありません」

一の言い方では、了の申し出が依頼に刷り変わっている。やはりそれは氣遣いなのだが、一の立場が悪くなることも考えられた。

「はあ……。ハギヨシ、お父様と先にお屋敷に向かいなさい」

執事服を着た男性は頭を下げてきびきびとした動きで離れていった。残ったのは龍門瀏透華という少女である。

「お手数をお掛けしてしまいましたわね。迷惑手当てに、3万でいいかしら？」

透華は了が手伝った理由を知らないからこそ、無難に現金を支払い龍門瀏家が非難されないようにフォローしたのだ。

「訂正しておくことがある。一の疲労が溜まっているように思えたからこちらから申し出てほぼ強引に荷物を運んだ」

一が不利になる証言を一番先に訂正した。更に了の言葉は続けられる。

「報酬なら、一に渡してくれ。働いてる理由だってあるだろうが、

少しだけ休みを増やしてあげてほしい」

現代の日本に金が不要な人間はいない。もらえるのならもらうであろうそれを、全て辞退するのだ。そのことを知る人数も少ないため、沽券も理由にならないのに、だ。

「今回の場合、目的が違うんだよ。一が心配だったこと。そして何よりこんなに可愛いメイドさんには好印象を与えたいから、な」

「言いたいことは分かりましたわ。私も一が働きすぎだと思ってましたから、良い機会ですわ」

最初から透華からは嫌な印象はなかった。実際にも気品ある令嬢である。

「改めまして、私は龍門渚透華と申しますわ」

「オレは上埜了。先程の失礼の数々は許してほしい」

一が買ってきた物は幾人かのメイドが取りに来たため、あるのは了自身の買い物袋のみであるのだが、透華は白色のビニールに透けて見えた文字を目にして素早く思考を巡らせた。

「あら、そのことでしたら勿論……只じゃ済ましませんですよ」

透華が見たのは、一般的にマイナー過ぎる商品である。それは『麻雀煎餅』という、プロ雀士のカード付きの煎餅である。ただ、麻雀というチョイスが微妙であり、一部のコアな人々の中では話題のお菓子である。

「はじめ、智紀と一緒に衣を呼んでおきなさい」

「で、でも……」

一の困惑の揺れが一瞬大きくなった。

「良いからお行きなさい」

「……うん。分かったよ」

一は後ろ髪引かれるように屋敷の離れに向かう。互いに悪感情のない2人ではあるが、主従の関係は無視できないのだ。

「はあ。もう少し言い方考えろよな」

不器用な主人の態度に、堪えることもせず、ため息を吐いた。

「あら？どついつことですか？」

「キミから悪意は感じない。むしろ何かを期待するような……何にせよ、一方的に責められることはないだろうよ」

目を見開く透華の頭頂部のアンテナのように立つ髪の毛がピコピコ動く。

「貴方……エスパーですか？」

「視界の中の、自分に対して向けられた感情のみ、色彩的なオーラがあるような、ないような」

何処までも感覚的で根拠のない経験論なのだが、透華にはそれが冗談にも見えなかった。

「変人ですわね。普通の方なら一笑の下に切り捨てるような言動ですわ」

「だから、そういう『色』だったんだよ。だから話した」

ただ、立っているのも時間の無駄で、それからは会話がなのまま――
が向かった敷地内の別邸に足を運ぶ。

「さっき言ってた衣……違ってるなら智紀ってのは異質みたいだな
？」

了は透華から睨まれる。その感情は激しく揺れていた。感じられた
怒りは、義憤のようなもの。

「言葉が足りなかった。特化した才能を持つってことな」

そこで落ち着きを取り戻した透華に、好印象を持つ。幼少に家族や
久、幼なじみ以外の自分本位な人間に触れてきた経験から、歪みの
少ない透華の存在は好ましいのだ。その過去もトラウマなんて大そ
れたことはなく、ただ他者を道具のように利用する人間が若干苦手
なだけ。

「やっぱり麻雀するのか？」

最早驚きを表すことが馬鹿馬鹿しく感じられ、透華は眉間を揉み解

す。

「ええ、ええ。そうですね。私は貴方の打ち筋を見学させていた
だきますけど」

「麻雀には……いや、幸せだった思い出は麻雀にしかなかったから
な」

ぽつり、と独りごちる姿は哀愁を帯びたような、色褪せたちっぽけ
な人間であった。

「……？何か言いました？」

「何でもない。とーかちんの期待に応えられるように頑張るさ」

一変していた様子をおくびにも出さないのは、やはり現在見える世
界が鮮やかだから。色褪せた過去の中にも変わらず彩られた光景が
確かに脳裏にはある。

「ちょっと！とーかちんって何ですの！？え、独断決定？取り消し
なさい！」

今は春の陽気の照らす午後。

【 - - 散りばめた花の薫りも見事だが
長閑けき風は宵の満つ月 - - 】

牌譜6：『登龍の家』（後書き）

国広一。

龍門洩透華さん付きのメイドですが、名前の表記が分かりにくいので聞きます。

『一』か『はじめ』のどちらの表記が良いでしょうか？

主人公。

感情が見える？

その状態に関わるキーワード。

人間不信。左目。闘病。ステルス発見。

牌譜 7 : 『海底寂聴』 (前書き)

表現が疲れる……

いろいろな間違えてたらごめんなさい。悪気はないはずです。

今回は主人公の見た目に触れました。

今回から『後書き伏線組合』を掲載したりしなかったり。

たまにあります。

牌譜 7：『海底寂聴』

通された部屋には、丁寧に使い込まれた自動麻雀卓があった。中にはメイドが2人、小動物っぽい少女が1人いた。

「八荒への旅路すら奉ぜんとす比丘となるか、月満つ夜の惨毒蠹触^{ざんどくとしよく}に襲^{やっ}る贄か。何れにせよ情弱な愚蒙鈍物ではなからうな……」

ウサギのような容姿に似合わぬ鋭い眼光と古風なセリフが了に向けられた。気圧されてしまうような気迫を、風を受けた柳のように涼しげにする。

「始める前に、1つ言っておくが……」

今度は了の鋭い真剣な視線が少女に向かう。それは当に舌戦による前哨戦か。緊張の高まりが熱に換わり肌をチリチリと刺激する。少女も愉快そうに見据えている。

「2、3分程でいい。抱き締めさせてくれ」

魔法の言葉による瞬間冷凍。固まる少女を余所に、そのまま抱き抱えた。小さな身体は片手で持ち上がる程で、空いた左手で頭を撫でる。

「は、はなせ。ころもを子供扱いするな」

リボンの形が相俟って仔兎のような少女、天江衣はじたばたするが、一切の無駄なく抱き心地を堪能され続ける。

「お、お前なんか……何か前髪もっさりしてて変な奴め！」

了は左側の揉み上げが長いこと以外は、そこそこの長さの黒髪である。そしてふわふわとした質感の癖っ毛は威圧感のないつり目に合っている。

しかし、注視しなければ分らず、それでも気にする程ではないが、同じ長さの前髪の左側3分の1の量が多いのだ。

「ワカメめ！ころもを離せこの海藻苔屑頭！」

暴言を伴う抵抗で拘束が弱まった。それでもまだ衣が自由を得るに

は決定打に足りない。

「ほう？海藻苔屑頭とな？」

カチンと来たのか、ふざけているのか、了は衣を持ち上げ、右肩に乗せる。衣に2、3程の言伝てをし、そのまま器用に髪の毛を弄り始める。

「とーか。とーか」

声が掛かったことで衣を抱きしめた辺りから動きが止まっていた透華が再起動する。はじめは困惑しており、もう1人のメイドの少女、沢村智紀は静観していた。

「な、何ですの？」

透華に話し掛ける衣は何処かそわそわしている。それはサプライズ企画をしている子供のようなだった。

「とーかのチビ」

状況としては小さい衣が、了の肩に乗って透華を見下ろしている所

であり、予想外な事態に再び透華は固まってしまう。

「こ、衣ー！？」

しかしながら今回の一時停止は素早く解かれ再生される。その騒動の中、了は変身を遂げていた。その一部始終を見ていたのは智紀だけである。

「……柔らかい」

眼鏡と漆黒の長髪の彼女がメイド服を着ると、静かで真面目な雰囲気がよく似合うのだが、興味の沸いた事柄への行動力は高めなようで、そのギャップも魅力的である。

了の髪の毛の左側は編み込まれていた。智紀は悠に首に届くその黒い髪の毛に触っているのだ。了は慣れた手付きで髪をヘアピンで固定していた。

「オレは上埜了。名前を聞いてもいいか？」

「……沢村智紀」

自ら騒ぐのは苦手だが、騒がしい友人に苦手意識はないようだ。メイドではあるが、今回のように透華に振り回され、控え目ながら一緒に楽しむ姿の想像に難くない。

「そうか。それにしても、ともきんの髪はきれいだな。うん、肌も白くてすべすべしてるし、何よりも表情が軟らかい」

智紀は今まで容姿に対する賛辞を世辞まで含めて何度かされたことはあったが、少し高い長身のため男性から可愛いと言われたことはなかった。

加えて容姿を誉められる時に、何時も含まれていた下賤な下心が感じられなかったこと、かといっていい加減な賛辞の羅列でもない。そして表情の軟かさ、は容姿でもあるが感情にも左右されるものであり、智紀は容姿ではなく人間を誉められていることに気付く。

「嬉しい」

「その表情も良いなあ。ともきんも一緒にそこに座らない？」

了は僅かに距離を置いた場所の5人掛けのソファを指した。

「ダメ。……職務中」

「それもそうか。……つか麻雀するんだったか？」

脱線解離からの軌道修正を聞き、肩の上で透華に勝ち誇っていた衣の瞳が鋭い光を放つ。

「そうだ。貴様の世界は必定無情に壊劫と化すであろう」

未発達な容姿に反するカリスマ性を持つ。その存在は幼霸一軀の顕現を成されたか。

「株を守るか……杵を持つか。箱の中身は悲喜交々。心して開けるんだな」

引き延ばされ遅れた舌戦に戦意高揚を。了と衣は互いに同じ条件となる対面に座した。了の上家にははじめ、下家には智紀が座り、了の後方では透華がソファに腰掛けている。

高揚した心はそのままに、思考は十全に冴えていた。衣も邪気なく、雑念なく座っている。熱された空間、親を決めるために中央でサイコロが転がった。

「衣は親じゃないのか……」

了の下家の智紀が親となったため了は北家、衣は南家である。南場までの半荘戦、赤ドラは使われていない。順位配点のウマはなく、30000点配給の返し点無しである。

第1順、了の前までに北2枚と西1枚が捨てられている。

- - 【一八256699 肆漆玖北白6】
北は出来ても対子まで。まだ様子見か。

河に白が増える。第1順では誰も鳴かず、そのまま5順目まで続えた。

- - 【六八4566699 肆伍漆北】
7萬は既に2枚捨てられているな。

自摸した西を即座に切り捨てる。まだ誰も副露をしていないが、視界から分かる範囲で牌の進みがあることは見える。

緊張感を保ち、不気味な沈黙を保ったまま14順目に入る。

【四五六45666肆伍漆捌九】

12順目には三色断幺九の狙える一向聴となっていた。必要牌は6筒か索子の679。了は9萬を切り、16順目に9索を拾う。

「……ふう」

7索を捨ててのダマ聴。了の自摸はあと一度。36索の両面ではあるが残ったチャンスは少なく、黙したままの衣の様子を見ていた。

10順を過ぎた辺りから衣の自摸は手牌に入れられることがなかった。焦りも陰りもなく、流れも順調でありそれは予定調和の気配を香せている。その進行が誰かの支配力とするなら、やはり衣の17枚目の捨て牌で示したリーチに集束するだろう。

天から投じた石は、幾重もの軌道から河に墜ち、その波紋は海へ向かう。

- - 6索……は自摸できず。今のころもののリーチは海底狙いか。

また投じられた小さな波紋。了が点棒を弄る間、揺らめきを宿した海面は、しかしながら静寂の鏡か。最後の欠片が集った水面は明鏡止水となり、現なまま幻想に月は海底に墜ちる。

そこまで来たら、あとは掬うだけ。

「海底撈月 ハイテイラオユエ」

【一一二二三三三11789 式漆捌玖・参】

立直一発純全帯么九一盃口海底撈月門前自摸。合計8翻のそれは倍満を示す。衣の最後の自摸には期待の感情はなく、淡々とした確認だけだった。

「40000・8000」

子の了は40000点の失点なので、掴んでいた点棒をそのまま衣に渡す。これで衣は160000点を勝ち取り、合計460000点となる。

「で、この打ち方が、例の特異性か？」

リーチの瞬間も、自摸確認も、まるでその牌を知り得たかのような手際。積み込み不可の自動卓で、その動きとなれば超常な支配力を要する。

「ええ、そうですね。ころもの『海底』からは誰も逃れられませんわよ」

了の質問に透華が答える。それに対する反応は恐怖も絶望もなく、ただの溜め息。

「ころもんは『麻雀』したこと、ある？」

「麻雀？今現在当に行っているではないか。ボケ？ボケた？」

透華には、了の発言が現実逃避に聞こえた。あり得ない、認めたくないといった感情が衣の麻雀を否定したのだと。そして出会い頭の予感めいた直感は錯覚だったのだと。

「ころもん、天江衣がやってるのは『麻雀』じゃない。それはソリティアって言うんだ」

両目を閉じたまま語る。山の牌は一切見えない了だが、その奇跡的な才能の持つ一面的な脆さを知っていた。そしてそれを上手く克服した少女も。

「今から『麻雀』をさせてやる。視界狭窄の誤認世界に沈むことの無いようにな」

長い髪が掠めている左目が一瞬だけギラついたように見えた。衣同様に覇気が周囲に充溢していく。それは包み込むような黒い闇の色の覇気である。

「僭越ながら、『風打ち』を演じさせていただく」

花朶る鳥の翼は風を迎え月を仰ぐ。

「海面に訪れる風ぎはなく、現幻 うつつまぼろし の狭間を渡り来る月は怒濤に吞まれて消えるだろう」

変幻自在の風が吹き荒れる。揺らぎ、歪み、騙す塵気楼。覗き見た海底は白い霧に沈む。

牌譜 7：『海底寂聴』（後書き）

天江衣の和了

【一一二二三三三三？？？？？12789・3】

●立直。略

●一発。略

●純全帯么九

么九牌のみで作る全帯么九を字牌を使わずに作る。

●一盃口

順子のペア。今回は【一一二二三三三】

●海底撈月

第70自摸でツモ和了。嶺上牌も自摸数に数える。

●門前自摸。略

『後書き伏線組合』

咲は嶺上、
衣は海底、

こまつつあんとか、
てるー

にもアニメ見てないから知らないけど何かあるっぽい。

共通は特定条件の牌が見えること。

ならば、主人公は何を見る？

しかし主人公には自摸に対する強運は一切ない。

いろいろ間違えてたらごめんなさい。悪気はないはずですよ。

廃腐1：『全力麻雀』（前書き）

全力で生きてみた。

麻雀の表現に過剰な演出が含まれています。
フィクション？当たり前です。
ぜったいにまねしないでください

Q：遊戯王？

A：麻雀です。

魔腐1：『全力麻雀』

人気の少ない旧校舎。そこには麻雀部の部室があった。日々様々な賑わいを見せる麻雀部は、今日は異彩を放っていた。

全力麻雀。突然提案されたそれは強引に押し込まれ、若干やけくそなノリで始められた。

「その『中』貰い受ける！」

京太郎の副露により、三元牌の白發中の刻子が全て京太郎の手元に揃った。その速さは神槍の如く、最早相手の心臓を捉える直前である。

「な！京太郎が三元牌揃えたじゃえ」

中を捨てた優希は『包』によって京太郎が大三元和了した場合、その半額の負担が決定した。そして何時もよりリアクションを大きくしている。

「このターン、まだエンド宣言をしていない。不要となった牌を捨てさせてもらう」

京太郎が牌を捨てる。全員がやけくそになっている割に面子では役満確定なので世の中は不思議なものである。

「次のターン、お前たちの牌を生け贄に新たな面子を召喚させてもらう。どうした上埒了？やけに慎重じゃないか。ふふふふ。だがその慎重さが、お前の未来を破滅へと推し進める」

京太郎の下家である了は、未だに自摸をしていなかった。しかしこれは全力麻雀。消極的な行為は禁止されているのだ。そしてまた了の瞳には強い輝きがあった。

「ドロー！京ちゃん、お前に次のターンは回って来ないぜ！」

「何……！？」

京太郎の驚きを身に受けながら、了はドローした牌を手札に加える。ここで反撃に必要な牌は揃った。

「バーサーカー暗槓子を発動！これは手札に4枚同じ牌が揃っている時に発動出来る。4枚の1筒子を場に召喚し、嶺上牌を1枚ドロ―する！ドロ―！8索子の暗槓子を召喚。更にドロ―！2萬子を暗槓。これで引いた嶺上牌は3枚目だ」

3連続で槓子を出した了から、えもいわれぬ厳かな気配が出される。それはまるで災害の前触れ。京太郎は背筋に薄ら寒い気配を感じていた。

「神を見せてやる……。場に3体の槓子が出ている場合、更に手札から4枚揃った槓子を晒すことにより、4枚目の嶺上牌を手札に加えることが出来る！見るが良い！古より伝わる伝説を！」

4枚目の嶺上牌の自摸に、誰もが輝く何かが見えた。それは、神聖な輝き。京太郎の場の三元牌を打ち砕くアポロンの焰。

「一気に4回も槓を……！」

「これは、まさか……」

「役満和了四槓子！？」

驚きを隠せない一同に対して、不敵に笑った。奇跡的な四連槓を引き寄せる了は普段とは違うのだ。

「積み上げられた四槓が織り成す奇跡に刮目しろ！これがお前の大

三元役を打倒する！伏せ嶺上牌オープン！」

了が自摸した嶺上牌が場に出された。それはローカル役花鳥風月の花を現す5筒子である。そしてもう1枚、最後の了の手牌に誰もが息を呑む。

「四槓 スーカン ……算了 サンラ ……！！」

流局だった。

廃腐1：『全力麻雀』（後書き）

最後の2枚。

嶺上牌の5筒子と東

なにこれテンションやべえ。

『すーかんさんら』は2家以上でのカン4回なので、実際には1人でカン4回しても続行だったかと思えます。

牌譜8：『月下人和』（前書き）

正直に言うと、一時期クロスオーバーにするか迷った。
それほど『咲 - s a k i - 』の男性キャラ成分の不足は深刻。

京太郎、ガンバレ！

牌譜 8：『月下人和』

場が支配する気配の変容は明らかであった。その直前に動いた了の感情が原因であることも。

「やはり、衣の麻雀は他人を苦しめるか……」

了の発言は衣の麻雀の否定に取れる。実際にそれは正しいが、果たしてそれは打ち筋のことなのか。

「だから、苦しめるとか以前に、麻雀を……天江衣自身の麻雀をしる、ってことだよ」

その言葉の真意はこの場にいる誰も分からず、しかしながら衣に疑問を持たせた。

「ころもんは麻雀が楽しいか？」

「衣は……」

沁みる声に聞き入り、悩む中にされた問い掛けに詰まる。衣は無明の暗闇に迷い惑う。

「楽しいのなら言葉が詰まることはないだろうな。それに天江衣が麻雀に求めているものは勝ち負けじゃない」

挑戦的で、包み込むような覇気を出しながら、それは衣には優しい光明が見えていた。

「個人が求めるソレは、意外に単純なものさ。特別も平凡も別け隔てなく、特に足下ばかり見てたから、ころもんは直ぐ傍にあるソレに気付けなかっただけ」

少し考えて、でも分からない。それでも次に顔を上げた衣の目は力強かった。

- 理解不能。思考言動全貌摩可不可思議。だが、何か掴めそうでもある。

「麻雀が『楽しい』から勝ちたい……。自分の求めるその『楽しい』が見付かった時、麻雀は姿が変わる」

その言動は単純でありながら特定されることでもない。しかし地図というよりは道路標識のような雑把証言だったとしても、方向は示されたのだから。

「衣は、衣を探すのか？然すれば天下地上遍く召命の命運だけでなく、人の和にも交ざれるか？」

諦めながら、求めていた。無視しながら、探していた。直そうとしながら、壊した。出ようとしながら、塞いでいた。

十重二十重に矛盾した理想への渴望と現実への諦念との錯綜の末に停止していた、万里を巻き込む程の感情の波濤。

「荷物が重いなら手伝ってもらえばいい。そして今度は自分が手伝う。周りには、こんなに頼もしい仲間達がいるだろう？」

両親の死から迷子であり孤独だった。鮮やかな色が薄れた頃から、透華も連れてこられた友人たちも何処かに釈然としない齟齬があったように思えた。孤独の身となった衣への、透華からの施しなどではなかったのだ。

- - 全て勘違いだった。変わってしまったのは衣自身か。

少しだけ疑っていた。人智からの良知外、災厄を呼ぶ『特別』を持った己に友人が出来ることはない、と。自らの弱味であり本音である、その揺らぎは呆気なく返される。知らず知らず叶っていた願いを見ていなかった自己を知る。

気付けば簡単なこと。いつも変わらず世界には光が溢れ、丁寧に紡がれた人の和の温もりにはこそばゆいながらも離れられない心地好さがある。そこに於いて、光と温もりに触れることに特別さや異常さは意味を成さないのだ。

「これが、衣か。そうか、これが衣。衣は、みんなが好きだ。きっと、だから今は勝ちたいと思える」

衣が変わり始めた。透華も智紀もはじめも、その変化が分かった。これから改めて、そして本当の意味で友となれるのだ。厚い岩戸の内に隠っていた衣は、見向きもしなかった宴会ではなく、ちよつとした穴から覗く外の世界にある希望を見たのだ。

「分かったなら好きに打てばいい。今は色々と勝手が変わっているがな」

現在、視覚情報に変化はない。しかし全員が、肌が深海のような闇の中を見ているような妙な感覚に陥っている。視覚への刺激がない

からこそそれは珍妙な違和感として処理された。

「次はころもが親だ。ころもは『皆と一緒に』楽しみたい。でも手加減とは違うと思った」

スイッチによりサイコロが自動で弾かれる中で、衣は瞠目しながら考えを話す。

「これからは『知恵』を使う。『運』にも頼る。『意志』で打つ。『自身』の麻雀を探す。だから……皆で楽しもう」

狭世界の孤独を現した衣の特別は今から目標の礎に変わる。思わぬ所での衣の成長は喜ばしいものであり、透華に至っては感涙している。

「ころもが、こんなに立派に」

涙をハンカチで拭う辺りはやはりお嬢様なのだろう。若干はじめと智紀の瞳も赤くなっている。齟齬に軋んだ雰囲気は最早消えていた。

5筒をドラとし、配牌では【二四七13556伍捌玖玖北】が並ぶ。了は4筒を自摸し、河に北が増える。

今回衣が海底牌を拾うためにははじめからポンをするだけでいい。少なくとも今まではそれで牌の巡り合わせを支配してきたのだから。

そして衣は『自ら』今までと同じ打ち方を、攻めを選んだ。それは、ただ与えられるままに牌の取捨成形をする『ソリティア麻雀』ではない。

9順が終わり、了が並べた形は【四113455667捌玖玖】の二向聴となっている。

- - ころもは【一二三2277参肆陸陸東東】か。東は1枚切られてしまったが、微かに山から匂いがする。

既に一向聴を作っている衣は海を覗く。無論それは感覚的なもので、しかしながら予感めいたそれは的中する。

- - 見えた、2筒か。

イカサマではなく、第六感による超直感である。7筒を自模すると同時に34索子の塔子を崩す。

訪れた15順、はじめの捨てた東を衣が副露し海底軌道に乗る。はじめにとって海底コースはトラウマだったのだが、親の連荘に対す

る怖さはあるものの、不思議と超常的な恐ろしさは薄かった。

感覚的な恐ろしさが減じていたとしても、結局その軌道は逸れず、衣が海底牌を自模してしまう。

「な、んだ……と？」

衣の海底は2筒を掴むことが出来なかった。2筒の幻視は薄い靄、舟が進んでいた風いだ海面は蜃気楼に沈み、現実が舟を呑み込む。

- - 6 萬……ころもが掴まされたか？ いや、誰にも動きはなかった。なのに読み違い？ いや、この違和感は……ッ！

思考の末に挑戦的でありながら威圧感の低い覇気に合点が行った。異なる海底牌を掴まされたのではなく、元々より『見えていなかった』のだ。その状態で感覚的には見えた、と誤認した結果で偶発的に海底を2筒と認識したのだ。

衣は海底を捨てなければ聴牌が崩れる。智紀とはじめは同じ牌を捨てているが、了は捨てていない。

- - 萬子は比較的早くに27を、終盤には159。萬子の生牌は4のみ。しかしこれは、不安を感じているのか？

どうしても視界は拓けない。了の捨て牌は筒子が最も少ないのだが、衣は足下が不安定にぐらついているような感覚に囚われる。

「ロン」

夢見心地のままに牌は衣の手から離れ、河底に収まっていた。無意識に行った打牌は、了の声により理解した。

「ホーテーピンファイペードラ2……満貫だ」

【四五11445566漆捌玖・六】

平和一盃口河底撈魚ドラ2

海底の読み違えに加えての振り込み。今までの衣には有り得ない現象である。しかし了の口車に惑わされた、では説明が付かないし、衣の意識変動による動揺でもない。

「ころもと同じ、異質奇才の持ち主か？」

和了役自体は平凡なものだったが、そうではなく衣の海底牌を防いだことだ。それは衣の支配を上回る才覚。

「才能じゃねえよ。これはちょっとした後遺症だ」

衣の『海底』を止めた了の覇気は、その捉え方によつては克服した身体異常の後遺症なのだ。才能ではなく後遺症。

「暗は人に有り、明は牌に有る。今はそれが反転してるがな」

了の眼は黒い。昔も色自体は黒かったが、それだけでなく昏かった。著しい色盲に加えて視力が低かったことと、家庭的な事情による精神的衰弱が眼の昏さ拍車を掛けていた。友誼のあつた幾人かとの麻雀での牌だけは明瞭に見えていた。

「でも、ほとんどデメリットは無いがな。それでも後遺症だ」

現在までに形成された性格は比較的新しい。九州に戻った時には驚かれつつも受け入れられた。むしろ構築されたその思考回路と判断基準には諸手を挙げる程に喜んでいた。

「多少思うところはあるが、過去に因縁もトラウマもない。気にせず麻雀をしよう。楽しい麻雀を」

語られない多くの出来事も、この場には不要であり、それらは既に

了には完結した出来事であり、現在に至る糧の1つである。

「はは。そーいうのに踏ん切り着けてる所も凄いんだね」

了が此れ迄に何れだけの歩みで、何れだけ立ち止まっていたかは分からない。それでも今まで恐さから、見ないようにしていたはじめにとって眩しく映る。

「色々な人に助けられたから、な。今度はこっちから助けに行く番だ」

憎しみと比べると、扶助や仁義は連鎖しにくい面がある。世間一般での善行には続けることが困難なことが多いからこそ、確固たる自己で打ち立てた意志がないと続かないのだ。

「じゃあ、今度はボクたちが了君を助ける番だね。ね、ころも？」

「ころもが助ける？……する！ころもが一杯助けて目一杯誉めてもらうー！」

幸福の連鎖。ここにも、また1つの人の和。麻雀に紡がれた新しく暖かい絆の形。それは盤上の勝敗よりも大切な、衣が求めていたモノ。もしここに勝者がいるのならこの空間にいる全ての人が勝者な

のだらう。

「期待しねえで待ってるさ。オレは美少女には寛容だから」

狂気と怪異を呼ぶ満月は、今宵ばかりは驚喜の下に快意を呼び寄せる。

暮れた陽光の名残が尾を引きながらも、宙空には煌々と満月が浮かぶ。

牌譜 8：『月下人和』（後書き）

了の和了

東場二局西家

5 翻

【四五????????789・六】

平和一盃口河底撈魚トラ2

●平和

雀頭が1筒で36萬の両面待ち。

●一盃口

456筒の順子が2面子ある。

●河底撈魚

海底は王牌の直前の最終自模であり、河底は最終打牌のこと。河底牌をロンすること。

●ドラ

略。

『楽屋裏の地下室』

●了とか結局何をしたのさ、と言う疑問の解決。
過去に失明しかけた後遺症により、超直感を牌盲に変えるような覇気で全体を包む。盲牌ではないので悪しからず。

●了にも何か見えるとか伏せてなかったか、と言う疑問。
条件付きで限定的に見えます。何がどのように見えるか、何にせよ自模運は十人並みですので悪しからず。

牌譜9：『意識変革』（前書き）

今のところ男子大会は出さないつもりです。
今回の後書きには『ういー』があります。

はじめが……和了できぬとは。

牌譜9：『意識変革』

気配が変わっていたのは了の『風打ち』の副産物である。衣が海底を見誤った原因は『風打ち』であるが、目的は他にある。

『風打ち』は相手の形成、成り行きを読むことだ。覇気の密度で浸透率が変わり、同様に覇気を持つ衣の場合は全体を包むほどに放出して漸く一部が『見えた』のだから燃費が悪い。

「疲れた。もう、ころもんの海底予見は防げない」

元々『風打ち』の目的は相手の超直感を封じるのではなく、直撃回避なので多量放出も常時放出も不要なのだ。

そもそも何故相手の牌を感じられるのか。それは他者の感情がモヤモヤと見える後遺症の副産物である。重要性の高い牌に意識が集まることで見やすくなるのだ。

親は衣からはじめに代わり、了の自風は南となる。小さな理由の下

にやっていた守株のような打ち方ではなく、元来使っていた能力を昔持った杵柄ではあるが駆使する事を既に前局において決意している。

以前に久が言っていた『鳥打ち』は対々和を使った和了形成であり、鸞鳳斉鳴を宛てて銘打ったものである。了の余念無く勝つ為だけの麻雀を『花鳥風月』に表したそれを分解したのだ。

『花打ち』では取捨選択。

『鳥打ち』で形を整える。

『風打ち』で危険を回避。

『月打ち』で勝負に出る。

衣の実力からやむを得ず封じていた打ち筋を晒したのではなく、過去の孤離していた己に似ていたからだ。全体からの孤離と一部以外からの孤離との違いはあるものの、そこに摩れた色合いが見えてしまったのだから。

【一一三八九漆捌捌玖西發發】

今回のドラは7索である。了は5萬を自摸し、西を捨てる。

3順が終わって、了には暗刻子1つと対子が4つできている。

- - 9 索子を拾えば一盃口聴牌。だが、自摸運高くないからな。あ

あ、この8索め。

8索を加え3萬を捨て、分岐先は増えたものの一向聴である。ここまでの速さはあるのだが、最初から整っていたため驚く程でもない。次も手が進まず、北を自摸切りした。

「ポン」

衣が自風を得る。そして更には海底牌の軌道に乗った。

「ペーポンペーポン」

衣には他人の進み具合が感じられるのだが、それは海底牌への超直感がそこに辿り着くためのルートを臆気ながらに感じ取らせるものである。そして海底牌が見えてもそこに道が無ければ違う役にするのだ。

このような自摸への直感ではその牌への経路も薄く見えるのだ。

しかし了の牌はどのように見てもアンノウンでしかない。疲労の関係から一部だが、見えないのだ。見えないからこそ存在せず、視界下で少牌とされ警戒の領域があやふやになる。

了は衣から發を副露し、捨てた9索を衣が直ぐ様に副露。了が鳴いたら衣も貰い鳴き。変わらず海底ルートのままである。

そうでなくとも場から、了と衣がそれぞれ役牌を持っているのだから、はじめと智紀は慎重になる。

そして13順に、大きく動く。

「ロン」

衣がはじめにロンを宣言した。そのまま牌を倒して見せた。

【七八11白白・玖玖北北北・九】

「チャンタ自ふ……」

パタパタと、そのような対面からの音に衣のセリフが止まる。

これは未知なのだ。了の存在は衣には測れない。その深さや広大さではなく、実力を見ようとする霞んで見えるのだ。

【一一一九漆漆捌捌捌・發發發・九】

「頭跳ね。トイトイ發ドラ2」

ダブロンの採用がない場合に於いて、複数家で共通の待ちに当たると打牌した家に対して上家側のみが和了となる。了ははじめの下家なので、今は一番近い。衣の全帯幺九は不成立となるのだ。

更に衣の40符3翻5200点から了の満貫8000点に変わったことで、はじめへの被害増額がなされる。

「危ねえ、ぎりぎりだった」

もし智紀が捨てていたら、逆に衣の和了しか成立しなかった。次は東四局、了の親番である。今回のドラは6萬となった。

【一四七1356式伍捌玖玖北4】

NPC相手ではないので、ここでいきなり四連風打が、という心配はせず北を捨てる。

「今度は、ころもが、勝つ」

最初とは違ったやる気を出しながら衣もかちやかちやと牌を捨てていく。スムーズに7順まで終わったが、了は未だに二向聴から先に

進めていない。

- 何とも微妙な。染められず、タンヤオも遠回り。

トップの親番なので安くとも早めに作り連荘を目指すものではあるが、安い役しか出来ない牌並びでありながら残りが揃わないという麻雀のデフレスパイラルが起きている。

「うう。揃わねえ」

16順には一向聴となったが、残る自模は2回。ノーテン罰符の可能性も色濃い。不要な6索を捨てようと河に打つ瞬間、了はその6索を握った。

「いや、こつちだな」

代わりに捨てられたのは塔子を作っていた8筒。それにより更に聴牌への可能性が遠退いた。後ろで見ている透華にも不可思議な打牌だった。

「ツモ」

明くる17順、智紀が和了した。

【四五六七八3345肆伍陸・6】
断么九三色同順平和門前自模ドラ2

「跳ね満は……3000・6000」

了は6000点を失う。やはり振り込まずとも、親番で子のツモ和了は手痛い。しかし、この東場が終わって直ぐの南一局で、衣が躍動した。

10順で了は立直したが、最初から一切の副露がないまま進み、衣は順調に海底を見据えている。

今までは暗中模索であり、牌は見えなかった。精神を明鏡止水に抑え、静かに見据える。揺らいでいた水面は一瞬だけ凪いだ。

了の覇気を消したのではなく、僅かに途切れたのだ。それは了の状態に由来するのか前局に於いても、打牌を直前で改める瞬間には見えたのだから。

「リーチ」

17順、残りの自摸回数が1回となった衣が海底に向けてリーチを宣言する。その時ばかりは了も寒気を感じた。

誰も鳴かずに、鳴けずに海底が浮かび上がる。衣はゆったりとした動きで牌に手を置く。一度目を閉じて呼吸による拍を刻む。

「ツモ」

今まではこの和了を出せば、やはりこうなったか、という失望落胆しかなかった。同じような和了であっても、無理矢理に加虐へ愉悦を見出だそうと足掻く必要はなかった。

何故ならそれは麻雀だから。天江衣が歩み始めた麻雀なのだ。今はその和了に対して心が、誇りが付いている。ならば恐れる必要はない。

南一局南家天江衣和了

【一一二二三三四五六七八九・六】

立直一発門前自摸海底撈月一氣通貫平和清一色一盃口

14翻、数え役満

「くくく。ころもん……最ッ高だ！」

衣の目には勝つ意志がある。他者も勝敗も些事としていた目とは違う。

確かに的中率が異常な和了は恐ろしいだろう。しかし、透華たちにはそのような事こそが些事だった。はじめが最もトラウマに感じていたことは、海底和了ではなく勝利の受け止め方だった。

衣に喜びはなく、ただ虚しさが残る。それは人らしからぬ人形のような瞳に見えてしまった。

はじめは麻雀そのものにトラウマがないから今でも打てるのだ。衣にもトラウマはなく、ただ坦々と麻雀に取り組んでいた衣が理解の範疇から外れていた。

「まだまだころもの会心爆進は終わらない。りょー、その首を滅菌洗浄しておくがいい！」

衣は相も変わらず、一切変わらないまま、自分を見て受け入れた。正しい欲求を曇りから晴れた眼で見付けた。

久方に賑わう感情を、自分の有りの俤に気付かせてくれた事に、衣は涙を溢す。その最高の笑顔で、人の和に入ったまま、麻雀をひた遊んだ。

世界は残酷ではない。世界は優しくない。世界は個人の内であり、不定無形のそれは立ち位置次第で将に千差万別なのだ。

牌譜9：『意識変革』（後書き）

上埜了

【一一一九九七七八八・發發發・九】

●対々和

7索の対子以外の面子が刻子である。副露の有無に関わらず2翻。

●役牌・ドラ

略。

沢村智紀

【四五六七八????456・?】

●三色同順

三種の数牌で同じ数に相当する順子を揃える。今回は『456』

●平和

面子は順子のみで両面待ち。役牌

●断么九

1、9、字牌を使わない。

●門前自摸

略。

●ドラ

略。

天江衣

【七八???白白・999北北北・九】

●全帯么九

面子全てに么九牌が関わっている。

●役牌

略。

天江衣

【一 二 三 三 四 五 六 六 七 八 九・六】

●立直

略。

●一発

略。

●門前自模

略。

●海底撈月

ラスツモ、海底牌での自模和了。

●一気通貫

1 種類の数牌で 1 2 3、4 5 6、7 8 9 の順子を揃える。2 翻だが副露をすると 1 翻。

●平和

略。

●清一色

1 種類の数牌のみ。衣は萬子で揃えた。6 翻だが副露があれば 5 翻。

●一盃口

同一順子が 2 つ。

●数え役満

1 3 翻以上で役満となる。

労働者達のういー

龍門渚さん強化。大会は多少弄るとしても清澄を勝たせます。

加えて、点数計算の方法載せてくりゃあ、という方がいればそのうち前書き辺りに突っ込みます。

次は清澄ですかね。

そして週末

- 1、ケーキを購入
- 2、若干ヤンデレピーチ
- 3、コカ社？ジスコ登場
- 4、ういーけんど

文通履歴：2（前書き）

さあ、皆さんと一緒に。

『すこにゃああん！』

変態主人公め。

文通履歴：2

4月×日

- - - Sending

To : Sukoya

件名：

本文：

今日買った『プロ麻雀せんべい』で、すこにゃんのカードが当たった。色気はないけどおでこは可愛かった。
最初に出会った頃の、段ボールに納まってたすこにゃんを思い出した。

- - - Receiving

From : Sukoya

件名：

本文：

そんな事実ないよ！？それに会いって君が道に迷ってた所に私がいただけだったよ？

今年は東東京のインターハイ予選の解説プロになったんだ。あ、カードは大切にしてね。

- - - S e n d i n g

T o : S u k o y a

件名：

本文：

実はその時すこにゃんも迷子だったという裏話。以前に寝てる所を撮った際どい写真もある。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : S u k o y a

件名：

本文：

迷子は偶々だよ！？私ってインドア派だし。

その写真は絶対他の人に見せちゃいけないからね？出来ればシュレツダーで。

- - - S e n d i n g

To : S u k o y a

件名 :

本文 :

捨てないことは確実。

オフ日とかにこっち来なよ。北信は東京と比べれば開放的だし、カード見たらすこにゃんを抱き締めたくなったから。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : S u k o y a

件名 :

本文 :

来週末は大丈夫かな？まとまった休暇がゴールデンウィーク直前から取れるんだ。

あ、そういえば今は長野県の方に住んでるんだよね。忘れてた訳じゃないけど、前に九州に行った時の印象が強かったよ。

- - - S e n d i n g

T o : S u k o y a

件名 :

本文

遠出したとしても学校くらいだから、それでも1時間は余裕を持つ

て連絡をしてくれ。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : K a n a

件名：

本文：

キャプテンは頑張つて文章の打ち方覚えてるけど、了のためについて理由が複雑だし。
了の牌の動かし方に違和感があったってキャプテンが言ってたけど何？

- - - S e n d i n g

T o : K a n a

件名：

本文：

みほちんの場合は正しいね。ま、教えないけど。

- - - S e n d i n g

T o : K o r o m o

件名：

本文：

まさか、ころもんが年上とは思わなかった。このまま育てば『合法ロリ』になる。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : K o r o m o

件名：

本文：

当然のこと極みに至る。ころもが違法な筈がない。

- - - S e n d i n g

T o : K o r o m o

件名：

本文：

自ら認めるなんて、新しいじゃないか。そこに敬意を込めて『ロリチーフ』という称号を授けよう。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : T o k a

件名：

本文：

ころもに何て言葉を教えてるんですの！？先程『ロリ何とか』と胸を張って誇らしげにしましたのよ？

- - - S e n d i n g

T o : T o k a

件名：

本文：

ダメだな。全くもってダメだよ。とーかちん、『ロリ』のことを何も知らない癖に、悪く言わないでよ。

ああ、確かにとーかちんは美少女さ。でも其処にはひた向きな爛漫さも、手折れそうな儚さもない。

『ロリ』という言葉に振り回されているんだよ。あとこもんは『ロリ』以前に美少女だ！『ロリ』であろうと崇高なんだよ！
敬具。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : T o k a

件名：

本文：

一瞬納得しかけたましたが、読み返しますと変態のセリフですわね。ころもに訂正をしてくださいまし。龍門渚の品位に関わりますわ。

- - - S e n d i n g

T o : K o r o m o

件名：

本文：

さっきの称号だけどな、周りに広まると危ないから気を付けてくれ。
具体的に言つと、鼻息の荒い太ったオッサンが馴れ馴れしくなるか
ら。

憤みがある美少女も大好きだ。

- - - R e c c e i v i n g

F r o m : K o r o m o

件名：

本文：

とーか達にだけ言つちやつたけど大丈夫なのか？
寧ろころもは憤みの塊だ。

- - - S e n d i n g

T o : K o r o m o

件名：

本文：

とーかちん達なら大丈夫。さっきメールしたら『変態の龍門湊の品位』とか送ってきたからな。

- - - S e n d i n g

T o : T o k a

件名：

本文：

ころもんの件は無事、完全無欠なくらいに解決した。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : T o k a

件名：

本文：

それなら安心ですの。先程から、ころもに避けられている気がしますわ。

- - - R e c e i v i n g

F r o m : M i h o k o

件名：

本文：

最初に私から送るのは初めてね。再来週のゴールデンウィーク中に君と麻雀したいの。予定は大丈夫かしら？

- - - S e n d i n g

T o : M i h o k o

件名：

本文：

みほちゃん凄いい。もう漢字を使えるだなんて……。愛って素晴らしい。ゴールデンウィークなら、憲法記念日はどう？

- - - R e c e i v i n g

F r o m : M i h o k o

件名：

本文：

確かに愛かもしれないわね。20回くらい打ち直したもの。その日の午前中10時頃に校門前で待ってるわ。

文通履歴：2（後書き）

点数計算。

子

1 6 × 符 × （2 の 翻 数 回 乗）

親

2 4 × 符 × （2 の 翻 数 回 乗）

符は最初から20符所持しています。一の位は切り上げとなります。

● 符

基本点：+20

『和了形』

門前でのロン：+10

ツモ：+2（平和ツモは-2）

『待ちの形』

単騎：+2

辺張：+2

嵌張：+2

『面子』

雀頭（役牌又は風牌）：+2

雀頭（自風牌かつ場風牌）：+4（大会で採用）

刻子：+4（明刻子は÷2、幺九牌は×2）

槓子：+16（明刻子は÷2、幺九牌は×2）

『例外』

七対子：25符固定

7 0 符 3 翻、4 0 符 4 翻以上、満貫。

8 0 0 0 ・ 1 2 0 0 0

6 翻以上、跳満。

1 2 0 0 0 ・ 1 8 0 0 0

8 翻以上、倍満。

2 4 0 0 0 ・ 1 6 0 0 0

1 1 翻以上、三倍満。

3 6 0 0 0 ・ 2 4 0 0 0

1 3 翻以上、役満。

4 8 0 0 0 ・ 3 2 0 0 0

計算上、2 5 符 3 翻は5 0 符 2 翻と同じである。1 0 0 点未満は切り上げとなる。

● 青天井

満貫から役満のくくりを消す。全ての和了で計算をすることになる。役満役は1 3 翻と数え、計算は指数関数であるため差は激しくなる。

牌符10：『だらり』（前書き）

遅くなりました。

日本語使ってる人に日本語が通じないのがいけない。

牌の表現について触れておきます。

。の中に数字が書かれた記号が、携帯の機種が原因で使ってもサイトで表示できません。

ローマ数字も同様で、他の方が共通して見ることのできる数が漢数字と英数字、旧漢数字しかありませんでした。

機種変更をして、表記の変更が可能であれば直します。今は分かりにくい旧漢数字となります。

牌符10：『だらり』

月曜日、早朝からしとくと雨が降っていた。了は自転車登校なので傘は割かし危険である。故に傘をささず、雨にも濡れない方法を取ったのだ。

僅かながらに奇抜な格好になってしまったためか、多くの視線を集めていたが、気にしないでペダルを踏む。

程無く校舎に着き、そのままずんずんと教室へ向かう。その威圧的な風貌は、気の弱い生徒の心臓には大変宜しくなかった。入室と同時に教室の中の時間が止まって、了は堂々と席に座って教科書の確認をする。

「お、お前、もしかして了か？」

恐る恐る京太郎が訊ねる。その答えをクラスが一丸となって注目する。

「は？あ、メット外してなかったか」

黒いフルヘイスのヘルメットを外したその素顔は、了であった。ただし、もっさり気味だった左側の前髪が急成長していたが。

「全く、驚かせんなって。『ダースβ』が隣に座った時はもう、あの種の覚悟をしたよ」

了は制服の上に黒いマントやブーツ、独特なマスク等の衣装を雨避けの為に着ていた。映画から飛び出してきたような格好に、終始視線を集めていたのだ。

「これ、お土産に入ってたんだよ。カップが無かったし、しっかりした生地だから大丈夫かな、と」

実際の身体は濡れなかった。その点においては、カップ代わりの役目は果たされていた。

「お前、その格好、リアルに見ると怖いんだぞ？自重してくれ、主に俺の平穩のために」

ストレスとまでは行かなくとも、京太郎は了と関わった場合高い確率で振り回される。それを了が楽しんでいるため尚のこと質が悪い

のだが、そこに一切の害意がないため許してしまう辺り京太郎も御人好しなのだろう。

そこにある妙な調和には背景に薔薇を見る女子もいる。妖しい視線を背に受けた京太郎は、世の中間違つてると思いながらも結構な割合で感じる臀部への視線に冷や汗をかいている。

「平穩なんてモノはな、無くなつてから気付くモノなんだよ」

「いや、今現在当に快速特急で離れてるんだって」

言葉だけなら良いのだろうが、平穩を遠ざける張本人である了が言つてしまうとそれはいけしゃあしゃあ、ということになる。更に、京太郎はまた悪戯精神を刺激してしまった。

「おいおい、京太郎よ。オレと過ごす一時は平穩じゃないのか？」

若干以上にイメチェンされた了の髪にも何処と無く感じられる艶があり、女子だけでなく何人かの男子も赤面してしまう。それを直視した京太郎も、畏と知りつつも捌いて流すことができない。

ようやく薔薇色に色めいている教室を認識した京太郎は頭痛を感じた。

「勘弁してくれ。最近女子以外にも変な目で見られてる気がするんだ」

実際に京太郎は男子トイレで背中に寒気がしたり、そこで何度も鉢合わせになる男子の目に戦慄しているのだ。一部の女子から送られる熱視線も危険な妄想の片鱗が見えそうで有り難みがない。

「あ、悪い。京ちゃんみたいに良い奴が隣の席だからって舞い上がったな」

たまにナチュラルに言ってしまうから手が付けられない。了があだ名で呼ぶ時は通常の会話であり、名前の場合は完全な悪ふざけか真剣な時なので慣れればその違いがよく分かる。

「オレもお前が隣で良かったさ。けどな、オレだって女の子と…
…『キャッキャウフフ』したいんだ！青春街道を走りたいんだよ！」

欲望のカミングアウト。フルオープンとなった京太郎の夢に対して、男子だけは京太郎を見直したのだ。

「始まってしまった。青春少年……『ますらお京ちゃん』の漢路が…
…！！！」

ある意味合いでは男らしく堂々とした欲求の発露であるが、内容もさることながら言動が恥ずかし過ぎた。しばらく京太郎は現実を直視できなかった。

教師陣もその表情に愁いと後悔の陰を落としていた京太郎に指名も注意もできないまま放課後になる。

「さあ、部活に行こうではないか、京ちゃんよ」

「どうせオレは……。ははは、笑っちゃまうだろ？でもな、女の子が好きなんだよ。カップル見ると眼力で殺してしまいそうな程に、な」

無気力と自暴自棄が重なり、更なる暴露が始まる。尊厳性の問題から速やか尚且つ静かに旧校舎に運ぶ。京太郎を予備のパイプ椅子に座らせ、それを台車でコロコロ運んでいき、旧校舎入り口のオブジェとして放置した。

京太郎を屋根裏まで運ぶ労働をするつもりは全くないのだ。

「親方が来たじえ！」

タコスを呑み込むように一口に食し、優希がパタパタと走ってくる。

「姉御、ご機嫌如何か？」

最初の和との関係で呼び方が2人の間で固定された。大きな意味はなく、互いに対等であるが、大きくずれたテンションを持つ故にある。

了は軽々と優希を抱き上げてくるくる回っている。

「こんにちは。優希と仲が宜しいんですね」

その言葉には焼きもちや嫉妬は含まれていない。主には驚きや意外性である。前回、最終的には険悪から抜けていたものの、ここまでの密はなかった。

「授業の合間や昼に情報交換をしたからな」

「そーだじえ！のどちゃんのおっぱいの良さを語り合っただじょ！」

本人を前にしての猥談報告である。傍迷惑な報告を受けた本人は羞

恥で紅潮してしまう。くすくす笑いながらゆっくり和の背後に回る。

「この窮屈な制服から見え隠れする『おへそ』もセクシーだな」

恐らく今後も積極的に了のセクハラ被害者となるであろう和だが、不思議なことに不快感はなかった。了が他人との境界の内側へ自然に入り込んできている、それは自分の領域が増大している様な気分を醸し出すのである。

「姉御よ、和ちゃんは可愛いなあ」

「そうだじえ！そんなのどちゃんは私の嫁！」

「さらに！そんな和ちゃんと姉御をオレが娶る！」

和の意志に関係なく強力な布陣が敷かれていた。了からの厄介さの度合いは同じ京太郎ではあるが副次効果が危険である。現段階ではねっとりとした視線だけなのだが、えもいわれぬ恐怖感がトイレで高まるのだ。

「入り口で須賀が荒んでたけど。あ、了がやったのね」

恐らく台車の上のパイプ椅子に座って世の中の恋人達への恨み辛みをばやいていた京太郎を目撃したのだろう。久は部室にいる了が原因だと分かり、納得した。

「はっはっは、久姉ではないか。さすがにここまで運ぶ気力は無かったのではな」

和にセクハラしたが故に普段よりも元気になっている。1週間前に仕置きで沈んでいた人間とは思えないのだが、結局その一時的な浮上は見事に沈められる。

「お仕置き変更ね。来週まで麻雀部員へのセクハラを禁止よ」

笑顔でウィンクをする美少女が見れた事は行幸だったが、発言内容が壮絶であり了はうちひしがれる。

久へのセクハラ禁止があつたとしても麻雀部のように美少女で占められている環境であるなら、その効果は薄れてしまう。もしかしたら元より、了がこの抜け道を見付けた瞬間に打ちのめし、更に期限を伸ばすつもりだったのかもしれない。

「仕置きはキツいが、あの笑顔を前にした二律背反。く、断れない」

感情と欲望との板挟みとなっている了とは対照的に満足そうな久はカバンを置いて麻雀卓に着いた。

「了、さつさと座りなさい。丁度4人揃ってるからやるわよ」

優希はパタパタと、和は未だに顔を赤くしたまま、そして了はのそのそと麻雀卓に着いた。

了のやけくそ具合を表すように、並べた牌は全て横に倒されている。一見すると余分に牌を持っているように見えるが同じ数である。

そのままのテンションで東場を一切の和了も振込もなく終えた。優希を中心にして自摸和了の被害はあるので結局は最下位である。

東西南北を十字形に並べて自摸した中を中心に据えて『セントクロス聖十字』等と言って喜んでいた所から当然といえば当然である。

そんなふざけた男のことを和だけは疑問を持った。単に逃げに徹して振込を避けることは不可能ではない。しかし、了は生牌や危険牌を悩むことなく捨て、そのまま通していたのだ。

まるで相手の待ち牌が分かっているかのような、そんなオカルト染みた打牌筋が理解できなかった。

- - もしかして先程やっていらした『聖十字』というものが？いえ、有り得ませんね。

行き着いた答えを即座に否定し、和は盤上に集中する。優希はやや楽天的な性分から気付かず、久は了のその打ち方を知っていた。

- - 夕飯どうしょ。屋台のラーメンでも食べに行くか。

和から向けられた視線に気付かず、自動卓でじゃらじゃら混ざる牌の音を聞きながら夕飯のことを考えていた。

牌符10：『だらし』（後書き）

この話の週末に、やっと桃子+αが！
知らない人はWebで

のまのま遺影な一言。

和やはじめの普段着に際どい服が多いけど、ナンパとか来るんじゃないかな？

牌譜11：『演出』（前書き）

遅くなりました。

最短でも3月中頃までは遅筆気味になります。

ネタ次第で早くなりますが、時間の不足とやる気の増減幅の影響が大きいので、何とも言えません。

牌譜11：『演出』

運命的な出会いこそが恋愛の基本である。それは漫画やゲームを通して了が学んだ真実だ。

ベタな展開であれば、朝に食パンをくわえて走っていたため曲がり角でぶつかってしまったという出会いもあるだろう。しかし、了はこの事柄を深く追求した。

食パンはトーストであったとしても、その強度から口にくわえながら走ることは難しい。更に、走っていると体が揺れるため同様にトーストは落ちてしまう。朝の登校という時間帯も微妙である。範囲が広過ぎて出会いがある確率が低いのだ。

それを統合して合理的に運命的な出会いを演出すべく画期的な指針が定まった。

放課後にラスクをくわえて自転車で下校するのである。

授業が終わる時間は学校内では共通なので部活動を除けば出会いの可能性が高くなる。そんな希望を胸に自転車が進む。

「なあお嬢ちゃん、ちょっとでいいからお茶しようよ」

「そーそー、絶対楽しいからさあ」

了の向かう曲がり角の先では時代錯誤なナンパが繰り広げられている模様。まさに壮絶な場面に出くわすのだろー、とラスクを口にくわえたまま角を曲がる。

「すみません、急いでいるので」

「えー。いいじゃん、ちょっとだけだからさ」

その先にいたのはナンパのセンスがツチノコのような希少価値を持つであろう2人組の男と、道を塞がれた和であった。新たな出会いではなかったものの、このまま見過ごすつもりもない。

「若人たちよ、その辺りで止めておけ」

颯爽と登場した了はポリポリとラスクを食べながら男達を指差した。

無論、そんな行動は彼らを逆上させてしまうことは目に見えている。

「そう、いきり立つな。確かにこんな美少女を前に情熱が溢れてしまふ気持ちはよく分かる。それはもう、寧ろナンパに加わりたいくらいの勢いで」

睨み付けてくるが、それをものともせず全力で共感を示す。そもそも、この現場に来る直前まで新たな出会いを求めていた男がナンパを否定することはできない。

「敢えて聞こう。お前達は女の子を無理矢理拘束したいのか？それとも、お近づきになりたいのか？」

本来的に男達は親しくなりたかったのだが、了の質問の意図を読めば間違っていたことが理解できる。笑顔でありながら何も表情から読み取れない了の雰囲気も重なり唾を飲み込む音が響く。

「そうか。やっぱり強引なやり口は嫌だよな」

言葉は出ずとも、歴とした男として、その意思は伝わった。納得しながら了はボタンを開け、制服の懷に手を伸ばす。

「その情熱や行動力は素晴らしい。だがな、やり方が未熟なんだよ。」

少し法律に障るが、矯正してやるうではないか」

ニヤリ、と不気味な笑顔を見せられた男達は凶器が取り出されるであろつ懷を凝視する。そして覚悟していたにも拘らず、出てきたものに驚きを隠すことができなかった。

「これを、授けよう」

それは1枚のディスクだった。薄いプラスチックケースに収まったコピーディスクである。

「こ、これは、いったい？」

説明なく渡されたため困惑するのは当然である。その様子に了は優しく笑い掛ける。

「それをパソコンに入れるといいだろう。オレのバイブルの1つだからな」

音楽CDやゲームのコピー配布は一応犯罪の部類であるが、結局バレなければ問題に取り上げられることはない。何故制服の内ポケットに入っていたのかは気になる所である。

「目まぐるしく変わる恋愛事情に慣れることができるぞ」

男達はようやく了の言っていることが理解できた。やり方が間違っていたのならば、これから正しいやり方を学べば良いのだ。了は態々その道筋を示した。

「丁寧に道まで示してくれるとはな。分かったぜ、俺達は今日から生まれ変わるんだ！」

そこには元気よく去っていく男達を満足そうに見る了と、展開に置いてきぼりにされた和が残っている。男達の物分かりが良かったからあっさり解決したのだが、暴力が出てきてしまったら最早勝ち目はなかった。その場合は和を連れての逃避行が始まっていただろう。

「今日も迷える子羊……いや、子狼に正しき道を示すことができた」

結果論になるのだが、しつこいナンパ男を撃退したのであれば迷いなくお礼が言えたのであろうが、生憎ナンパ男に同意した後にはスキルアップの秘訣を渡した了の対応への驚きで呆けてしまっている。

「和ちゃん、ナンパに慣れてない様だったが、大丈夫か？」

「えう？ひゃあつ！」

和は声が掛かった時に了の顔が意外に近くにあったので驚いてしまふ。赤くなる和の頬を見て合点がいったのだが、そこからの追撃はなかった。

「近すぎだったか。悪いな、いつもの調子になった」

口調こそ変わらないものだが、気配が何処と無く違ふ。普段とのギヤップから今の了が変態ではなく紳士のように見えてしまう。

「困惑？あ、今は麻雀部への過度な接触が禁止されているからな。今は違和感があるとも、来週となれば戻る」

了は本能的な行動実行派ではあるが、セクハラの大半は過大に増幅して動いているのだ。普段は美少女趣向を大袈裟に表した性格であり、今は大袈裟な言動がないだけで思考への変化は少ない。

「そうですね。それと、助けていただき有り難うございます」

真面目な気質であるため和は律儀に頭を下げる。情けないとすれば解決が朽ち果てた日本文化の1つである『袖の下』だったことだろう。

「大したことじゃないがな。ケンカになったら勝てる自信ないし」

中学生の時に脱モヤシを果たしたのだが、特別にケンカが強いこともなく人数差を埋めることは出来ないだろう。無謀な行動はしないが隙を突いて和と一緒に離脱する算段だけはしていた。

「ですが、相手の方も納得してましたし、円満な解決でしたよ。心情的には微妙でしたが、上埜君のおかげです」

不意に善行となった為に感謝された了は美少女に御礼を言われるシチュエーションにホクホク顔になる。

「感謝してるというなら、次回からは名前で呼んでくれ。久姉の苗字も昔は上埜だったから」

契約をする時は、その裏を見抜かねばならない。もしそこに巧妙に隠された真意があった場合、後からの撤回は難しい。和は今まさにその手口に掛かろうとしている。

「そういうことでしたら。了君、今日は有り難うございました」

久が接触禁止令を出さず、普段通りの了だったならここで笑みを浮かべていただろう。何かを企んでいるような黒い笑みを。

「おう。ナンパ野郎には気を付けろよ?」

自転車がゆるゆると駅前駐輪場に向かう。美少女に苗字から名前で呼ばれるようになる、という事は親密になるということである。最初から名前で呼ばれていた場合と違い、このケースではセクハラ
の威力が高くなる。

つまり和は、名前で呼ぶ事の本当の意味を知らないままセクハラという名の暴走車のアクセルを強く踏んでしまったのだ。

この出来事により必然的に一週間後から、何故かストレスが感じられないセクハラに心身共に疲労することになる。

牌譜11：『演出』（後書き）

今回ナンパ組とのやり取りが不自然ですが、ナンパ組もナンパに慣れていなかったことから非を認めたため、あっさりと引き下がったのです。

モブはこんな扱い。

主人公のケンカの腕前は平凡です。複数を相手にすると逃げます。素早さの低いメタル系モンスターです。

牌譜12：『酷甘』（前書き）

主人公のトラウマは些細なことが原因という。そんな簡単に劇的な因縁は出来ないんだよという罨。

1、2話挟むつもりが、特になかったという、ヤツが登場する話です。

他の作品も書こうかな、と考えたり。

牌譜12：『酷甘』

部活での麻雀に続き、龍門瀏家での麻雀は精神的な負荷を作り出していた。初日に休んだことを戒めるための罰を変更し、麻雀部員へのセクハラを禁止とした。

了はそのことを渋っていたのだが、すぐに罰を受け入れた。その仕置き重点是セクハラが出来ないことではなく、精神的な疲弊を癒し後々に発生するであろう不快感に耐えるための準備である。

これから必然的に過去に受けた心的外傷に意識が向いてしまう。それは麻雀において過去の打ち筋を使ってしまったから。

今までの了は、意図的に自己催眠を掛けていた。それが要因となり、久の知っていた性格から駆け離れてしまっているのだが、一時的にでも催眠が弛めば視力が下がり、焦点が合わせられなくなる。そして視力に関しては5分もあれば回復するが、しばらく鬱ぎ込むような性格となってしまう。

感覚的に感情を見ることのできる直感は、大元を辿れば相手に同調

してしまう性質になる。同調するからこそ自分に対しての感情が分
かり、麻雀では強く意識する牌が感じられる。

逆に自分を相手に同調させる場合、自分の感情で相手の感情を上塗
りしたり、衣にしたように超直感を塗り潰すことができる。

鬱ぎ込んだ感情が暴力的に干渉する。供給ではなくコピーであるた
め、了の中のストレスや心的外傷は一切緩和されない。久からの仕
置きは自分を落ち着かせ、ストレスを抑制させる為の目安となる。

陽気であり悪戯好きであり微笑ましい普段とは離れた性格が湧き出
し、行動は無味乾燥であり無感動となり機械的な反応に近づく。現
在進行中の症状は比較的軽度であり、態度ならば虫の居所が悪いよ
うに見えるだけだった。

学校では近くの席の生徒は気分的に優れなかった。霽掛かる感情が
投影され、思考との違和感や誤差に酔う。

無条件投影が比較的軽度であること、掘り起こされた過去の恐怖が
薄れていることが幸いして大きな被害が無いまま金曜日には元通り
になっていた。

トラウマの原因たる過去に遡ること10年程。了は祖父母と共に九州地方で暮らしていた。その頃は今とは全く違って静かなモヤシ少年だった。

了が麻雀に初めて触れたのは近所の子供に誘われた時である。生まれつきの色盲に加え低視力だったため、運動音痴として友人がいなかった了は人付き合いが分からないながらも麻雀を通じて幼なじみという関係が築かれていく。

少しずつ他人と同じように感情の出し方が分かり、大人とも話せるようになっていた。しかし、大抵の大人は了の親の財産が目的であり、その事実が了の感情を砕いてしまう。

九州では最終的に祖父母と最初にできた友人である幼なじみ達以外への人間不信となってしまう。環境を変えるために自然がそれなりに多い長野県に単身引っ越した。

元々、ある大企業の営業だった父親だが仕事で海外へ赴いた際に遺跡発掘に入れ込んでしまう。以来遺跡の発掘をした結果、財産が膨れ上がった。地元の九州では発掘の成功がそれなりに知られていたため、了に取り入ろうとしたのだ。

低い視力が更に低下し失明も危ぶまれていた時期、視覚の代わりに聴覚や嗅覚が敏感に取り入れた外界の情報の一つに大人達のその目

的があった。

失意のままに長野県の中学校へ転校したのだが、その先で変な少女との出会いが切っ掛けに了が変態に魔改造されたのである。

そして現在、ケーキの箱を片手に、するりするりと歩みを進める少年がいる。よく、小学生が『自分ルール』という意味なく行動を制限し、飽きるまで遵守する滑稽な遊びがあるが、当にそれである。今回は万歩計のカウントが0のままケーキを購入してくるというものだ。

そして摺り足は和の心。勿論了の独断的な偏見なので偏屈な考えだが、さながら武士のような気分になっている。アパートの玄関に着いた時の了の脳内では丁度宮本さんと佐々木さんに決闘を黒船の上で申し込んでいた。

しかし、締めた筈の玄関の鍵が開いており、施錠後のオートオープンなんて空き巣が喜びそうな機能も当然の如くない。限られた情報から了はいつも1つしかないと言われる真実を予約券の利用をしない内に掴んだのだ。

「む、曲者が！腹かつ裁いて越後屋の藻屑が目に入らぬ殿中か！」

何もない空間に指を差し、決め台詞の最中も摺り足を忘れない武士

道精神は西洋の騎士道精神にも誇れる程だと自負している。

「いやいや、色々混ざってるっすよ？」

指を差した先から霞みが揺らぎ、少女が現れる。そこに現れた少女、東横桃子は幻でもなくレポートや魔法、宇宙人なんてものじゃない、それは恐ろしく片鱗すらない存在感が為す現象である。

「確かに時代劇は全く見ないからな。仕方ないことだろうさ」

いつもは互いに安定した距離感がある。それも安定したまま近い距離なのだ。

存在感の無さ故に孤独しかなかった世界に諦めを感じていた桃子を見付けた了。そして中学で塞ぎがちだった了の心を開かせた桃子。宝箱から桃子は共有できたたった2人だけの世界を、了は世界に広がる色を見る眼を。

「ま、そうっすけど。いつも私を見付けてくれて嬉しいっすよ。いつも私を見ってくれるのはこの『目』だけ……了君自身を苦しめた了君の『目』だけ……」

桃子は了の左目に掛かる長い髪を分ける。過去の名残から首まで伸

ばし続けている左側の前髪を。桃子の目の潤み具合から、今は平均距離より狭くなりそうである。

「苦しめたって、大袈裟だな。それに、これでモモを見付けたってんなら、構わないさ」

左目を隠すためだったので了の前髪の左側と左の揉み上げ以外はそれほど長くはなく、アシメトリーとなっている。ふわふわとした癖っ毛なため、長い箇所は緩やかなウェーブで、短めの部分は外側に跳ねている。

「もっと私を見てくださいっす。顔が熱くなって心臓もドキドキ、触ってる手は溶けそうで、了君のことしか考えられない頭……ここが私が居たい世界っす」

4月下旬現在、桃子は約1カ月の間も了に会っていない。何気無い内容のメールだって何度も作り直したものだ。

桃子の予定では今頃は了と鶴賀高校に入学して十人並みでも幸福な日々を送っていたのだ。了の他校受験の事実を知った最初こそ、今までの関係からの繋がりで良かったのだが、虚無感に不安、更には独占欲や嫉妬までもが膨れてきてしまう。

了の帰宅までは耐えていた感情は、押さえていた衝動は、一瞬で桃

子を見付けたという確固たる事実、そんな小さな特別が揺り動かす。

「でもこの幸せも長続きはしないっす。一緒に学校に行って、何気無い挨拶をして、帰りにちよつとした寄り道もわくわくするっす。でも、1人じゃできないっすから」

桃子が欲した、もしかしたらの世界は、ここにはない。そして夢から覚めた時にのし掛かる現実の重圧は、孤独を強調する。完全な夢物語なら諦められたことも、唯一の例外として了との人並みで何気無い幸福な日々が脳裏を掠め、どうしても捨てられなくなってしまう。

「それも仕方ない、分かってたことっす」

とても甘美で残酷な思い出、時間の巡りに呼応して乾燥していく日常の喪失感果てなく響き、温かさを知った身にそれは何れ程の毒になるか。

「これから君は私を見付けてくれますか？」

桃子は目立たない存在感から周囲からは無個性に思われがちであり、認識すらされないことも少なくない。2人が初めて会話をした日は出会ってから2週間後のことだ。

その雰囲気の暗い少年は、桃子の存在を認識している節があり、行動に出るか、期待していいのかとしばらく悩んでいたのだ。

「シリアス過ぎ。それと話が長えよ」

積もりに積もった思いの丈は見事に両断され、吹っ飛んだ。

「あの頃は本当に『刷り込み』されたが、オレだってモモのことも好きだ。加えて極度の美少女好きにされたしな」

笑う。どちらからともなく笑う。その広がった視界は多くの光を受けていた。一方通行の感情ではなかった。想いは溶けても消えてもいないし、間違いなく本物の感情なのだ。

「そうつすね。今はそれでいいですよ」

今はもう霞んではない。晴れ渡った心は、本人をも輝きの内に満たす。

「今は、我慢してくれ。親の仕事の後を継げるまで」

それは机上の夢想とも言えない。両親の仕事を継ぐために方々の土産と共に届く教材により、経営学や交渉術、その他諸々を学んでいるからだ。その割に教養は突出していないが。

「やっぱり私だけじゃ、足りないっすか？」

「満足した愚者であるより不満足なソクラテスであるほうがよい、って言うだろ？その……当にそれなんだ」

「それここで使っとハーレム宣言っすよ！？ミルさんの格言が……」

ようやく桃子の調子が戻った。禁煙ならぬ禁了を1カ月、他者とのコミュニケーションを1週間挑戦した結果惨敗。家族も、桃子の存在は分かっても桃子自身を認識できないことも重なり、余計に不安定になっていたのだ。せめて学校に1人でも桃子を友人として求めてくれれば、ストレスの度合いが違っただが仕方がない。

「現実主義で自分の人間性に納得してれば、モモのことを見易いと思うけどな」

桃子は確かに存在感が薄い。認識の難度はそれだけではなく、他者の内面への融和も多大に関与している。

「現実主義、っすか？」

「モモは自他の境界域に入りやすい。存在感が低ければ警戒心が下がり、認めている自我より外側に入る」

その様子は一種の擬態とも言える。自然界で同じ現象が起きた場合、捕食者に気付くことなく狩られてしまうだろう。

「そしてそこには、無意識に抑制している衝動や認めがたい自我がある。切り離したい部分だが、離れない所だ」

「つまり、私はこの存在感の他に相手から避けられ易い性質があるっすね」

認識における反射反応と自己防衛規制である。自分の汚い部分を隠していたという思いが、桃子を避ける一因ともなっている。存在位置だけで嫌われるということは、何れ程の悲劇だろうか。

「心からモモを認めた人は、モモを見ることが出来るだろうさ。今なら『右目』でもモモを見付けられるからな」

左目を閉じたまま、桃子を捕まえる。今はその体温も鼓動も息遣いもはつきりと認識できるのだから。

「やっぱり酷い人ですよ、了君」

ケーキの箱を持っていない左腕で抱えられた。唇を尖らせながら、それでも幸せさを隠せない様子で呟く。

牌譜12：『酷甘』（後書き）

麻雀はお預けさ。

はい、ぶつ切りに過去の話にも触れました。謎や説明不足が多かったかもしれませんが、過去編はしばらく放置します。

主人公、自摸は平凡ですが、能力を見たら勝手に驚津やってますね。でも、トラウマ回避のために普段から驚津やってる訳ではないです。性格激変の理由は防衛機制のようなものです。過去の性格からの解離をトラウマの克服や思考阻害に押し当てているのですが、麻雀を通して思い出すというサイクルです。

原作……アニメ化やPSP進出があったことで忙しいのでしょうか。ひたすら待ちましょう。

大会前に他校キャラ同士での鉢合わせは、ダークホース的な清澄は無理ですね。風越と龍門渕ならあるいは……。

廃腐2：『熱気』（前書き）

意味なし。

前回更新から、長かった。これからはキャラの特徴を思い出しながらやっていきます。

糜腐2：『熱気』

麻雀部の部室に一般の生徒は近付いてこない。それは興味の問題だつたり旧校舎という立地条件だつたり、つまりそこは絶好の穴場となっているのだ。

現在部室には男女が1組み、荒い呼吸と軋むベッドの音が生々しく響く。視覚的には、組み敷かれている和と、その上で額に汗を滲ませている了が見えるだろう。

「ねえ、和ちん。凄く固いよ？」

イタズラな笑みを浮かべている了の言葉に、和は上気した顔で息遣いが荒いまま答えようとする。

「は、恥ずか……しい、ですから」

その姿には普段の堂々とした和はすっかり鳴りを潜めていた。

「恥ずかしい、ね。でも気持ちいいでしょ？」

身体を揺らしながら愉快そうに、しかしながら力を込めて動いている。動作に合わせて和が漏らす息と短い声は室内に熱気を留めていた。まだまだ涼しげな風が心地好い季節だというのに、滲み出す熱気と汗を始めとする匂いで頭がくらくらしそうな格差が顕著に見える。

意地悪な攻め句に、和は枕に顔を埋めて逃げた。その乱れた着衣はあからさまに仮眠用のベッドでは着く筈のないものであり、普段からルールに厳しい和に羞恥を誘う一因になる。

「や……あ、言わないで、ください」

精一杯、なけなしの抵抗を口に出すが、身体は否定の意を示さない。僅かであっても、言葉を発することで理性を繋ぎ止める為の抵抗だ。最早、和には平時の判断能力は見る影もなく、ただその抵抗自体が目的に擦り変わっているだけなのだ。

果てにあつたはずの理由はなくなっている。その事には、もう気付いていただろう。和がそのことを意識内で認めてしまったら、無意の抵抗は剥ぎ取られるだろう。

それでも、了は彼女の上から快樂に誘う。和が拒否をすれば辞めているとしても、滔々と示される感情は行為への肯定意外の何者でもなく、故にその快樂は加速を以て応えてしまう。

必死に声を我慢する初々しさに、了はやはり笑ってしまう。

「和ちゃんは、この経験は豊富だと思ったんだけどな」

了の言葉の意図に至らず、過ぎる時間で和は疑問と快樂との混濁に溺れそうになる。

「だって、そんなに立派な胸があるからさ」

堂々としたセクハラ発言。ある種の自己形成の手段だったのだが、今では反応を楽しむことが大きい。しかし今の和には返答を吟味する余裕はなく、条件反射の様にその質問に有りの儘に答える。

「興味はありましたけど、機会がなかったので」

それはあたかも床屋で見知らぬ他人に話さない内容の話を自然としてしまうような、全てを了に委ねた手持ちぶさたと安心感が助長している。

「実際に体験してみての感想はどうか？」

和が夢見心地になるようなテクニクとその蕩けたような表情があつても聞くことで嗜虐性を示す。混乱した思考では、被虐ですら快楽に思えてしまうのだから、行為の後で冷静になった和であれば悶絶しそうな内容だ。

「思つてたより……いい、良いです。……ひッ、んア！」

返答に満足したことで、更に責め立てる。時間という概念を捨て去つたかのような、果て無き刹那の繰り返し。閉ざされた内界では、途切れない行為を永劫に重ねた、最早高揚ではなく決壊を待ちわびる熱気に充ちていた。

待ちわびた、その世界の決壊。それは外では淡々と過ぎていた時間との帳尻合わせでもあり、不意にベッドを仕切るカーテンが滑る。

「な、何をしてる、ん……だ？」

京太郎が、叫び出しそんな勢いを萎ませて、結局は何をしていたのか訊ねた。うつ伏せの和の背中に両手を当てていた了は何処か残念そうな表情をしている。

「京ちゃん、唯のマッサージだって。胸に触れそうだったけど、唯のマッサージだったよ」

基より了は、自らに踏ん切りや納得が出来るまで特定の誰かと交際するつもりはなく、将来的に付ける折り合いまでは結論宙吊りの中途半端だとしても無責任をするつもりはなかった。

「何だ、唯の……いや、否！唯のマッサージだとしても、それは羨ましすぎる！」

ただ、その真剣な京太郎の言葉に、神妙に頷き返す了の姿には真意を見出だすことは出来そうにないだろうが。

「和ちゃんは有り余る諸事情で肩凝りは必至！ならばと、肩凝りと共に理性を揉み解し、好感度を上げてしまう」

秘められた下心を堂々と言い放つ事で台無しにしているが、自然と嫌味には聞こえない。和も京太郎も、同時に吐かれた溜め息には悪感情ではなく、ある種の予定調和になった一連の締めが込められていた。

「それ言っちゃ、ダメだろ。いつも通りだけどさ」

「全くです。これでマッサージが下手だったら目も当てられません」

事実として、マッサージは巧かったのだが、和もそれはそれで釈然としない思いも同様にあった。

「まあ、声を出してしまつて恥ずかしい、というか寧ろ癢ですが、またお願いしたいです」

後々からでも予想通り恥ずかしさが残っている様で、和の顔には赤さが浮かんでいる。そこには普段は見せない色気があり、京太郎は反射的に言葉を紡いでいた。

「オ、オレも！あ、オレはただ原村さんが心配なだけで」

一瞬の興奮が冷や汗を呼び、その弁解にはあまり効果がなかった。

「おやおや、京ちゃんも立派に男だねえ」

生暖かな了の視線は、京太郎に精神的ダメージを与える。彼女が欲しい年頃の京太郎にもプライドがあり、出来るだけ格好良さを見せたいのだ。

「須賀君、スケベです」

続けざまに和に浴びせられた言葉からは数秒の思考停止と、何故か責められる快感が与えられた。

この須賀京太郎、彼は麻雀初心者ではあるが、人当たりの良さや若干の甘さを残して調ったルックスが合わさり、本人が知らない所で人気があるのだが、目まぐるしい日々によってまだ気付かない。京太郎にとっても今の生活が気に入っているのも、本音では恋愛のみが目的ではなく青春という目的の中に恋愛が含まれている程度である。

やはり根本的には了の理解者なのだろう。共にバカな事をする、それこそが輝かしい生活の源の一つになっているのだから。しかしながら一般的ではない趣味を持つ生徒に狙われる等、被害も大きい事に頭を抱えてしまうのだった。

「じゃあ、京ちゃんが麻雀で強くなったら許可するよ」

結局最後には巧く乗せられた。京太郎も分かっていたし、発破を掛けられたなら応えて見せたかった。やる気の出る目標を前に、京太郎は麻雀に対する意志を強くした。

「それまでは、和ちゃんの可愛い姿は独り占めだけだね」

堂々とダシにされた和は、間違った男同士の友情をC級映画の１シーンのように眺めていたのだが、唐突に頬を摘ままれた。

和の柔らかな頬は、後ろに回った了に伸ばして遊ばれていた。和自身は触れ合う部分を意識するよりも、純粹な呆れに捕らわれていた。

何もかもが台無しになり、了と序でに京太郎は正座で和の説教を受けることになる。一切堪えた様子を見せない了の態度に、最終的にはやる気すら削がれるのだった。

牌譜13：『ステルスとスネーク』（前書き）

一部ひどいネタですが、スルーをお願いします。そして今回も麻雀はありません。

牌譜13：『ステルスとスネーク』

桃子は漸く気分的に楽になった。不安定だったのは了が消えて孤立状態に逆戻りしたかのような錯覚から暗い考えばかりが浮かんできていたのだから仕方がないだろう。

「これ、何っすか？」

積みもりに積みもった不安のせいで物色どころではなかったため、物色が始まる。両親からのお土産の他にも桃子のように慕ってくれている存在に関わらず、了は様々な『漢専用アイテム』を集めるので部屋には日々新たな発見がある。

桃子が訊ねたものは、金色のアクセサリである。瞳のような模様が1個だけ描かれた立体パズルであり、ピラミッドを逆さにした形だった。

「古代エジプトより伝わる『千年アイテム』。それを集めた者は『サウザンドマスター』って呼ばれる」

何処と無く禍々しいパズルをガラクタ専用の箱に追いやり、新たな物色で薄く透明なケースが積まれていった。

「このディスクは何すか？」

桃子がジト目で一枚のケースを見せる。そこには二次元的なキャラクターがプリントされていた。

「ギャルゲーに決まっているだろう」

その発言には勇気などなく、一切の罪悪感も羞恥心もない。そもそも普段から率先してセクハラをする男に自重を求めるべきではなかった。

「いやいや、こういうのがあるのは男の子ってことで認めるっすよ？」

長野県内では久と同じように最も気心の知れた仲であるからこそ、桃子がジト目になった理由は少し違っている。

「ギャルゲーが多いんすよ！前に来た時になかったのだけで5枚っすよ？」

桃子は既に諦めている。了が開放的な変態になった原因たる自覚があるから、一定の水準までは認めざるを得ない。しかしながら、僅か2ヶ月の内の増量にしては目に余る実態だった。

「ふ、何を言い出すかと思えばそんな事か。……まだまだこの道を理解するには至らないようだな」

「一応女っすから、理解したくないっすけど」

「最近買ったギャルゲーは、僅か3枚！」

桃子の突っ込みを無視して言動的に走り出した。了は親指から中指までを伸ばして桃子に示す。

「そして、その残り全て……浅はかにもギャルゲーと判断された、それらのディスクは、エ・ロ・ゲ・エ、だあああ！」

自信に満ちた、凜々しい表情のまま言われた内容を受けて、1人の女性として桃子は一部誇張になったとはいえ変態になるように教育したことを反省した。

「そ、そうっすか。私が悪かったっす?」

ある種の洗脳を受けた了の発言には理解が追い付かなかったり理性が理解を意識の外に追いやることは頻発する。

「精進が足りなかったな。それにしても、何時もなら外出中に物色は終わっていた筈だが、今日は何をしていたんだ?」

その質問に桃子は顔を赤くさせた。社会的生活が薄かったからこそ感性にズレがある桃子には、人一倍純情な面がある。

好意を簡単に表現することはあるが、普段は本心を伝えて甘えるようなことはしない。それとなく誘導して仄めかすことが多いだろう。

孤独であり了という存在に飢えていた桃子は、羞恥的なタガが外れていたから玄関先での想いの吐露以外に何かをしていたのだろう。

「その、了君の匂いで、こ、興奮してたっす」

「ぬーん」

興奮の度合いに違いはあっても、了が普段していることに大差がな

い。むしろ桃子が羞恥する行動を平然と行っていた事実、己の成長を感じていた。

「ほ、他には、私の匂いを擦り付けようとして、ベッドに」

視線を向けたベッドの布団には若干の乱れがあった。今まさに桃子は親に見付かってしまった悪戯を告白する子供のような心境だろう。了にだけ表せることのできる感情を表にして羞恥に目を閉じていると、腕が掴まれて引き込まれた。

「刷り込みも吊り橋効果も一切合切納得した上で、やっぱりモモを抱き締めてる。今もこれからも変わらず大切な存在らしい」

依存したり、尊重したり、助けたり、救われたり、感情全てを言葉にせずとも最も近くにある気持ちは伝わる。

普段から真面目に美少女を求めているとしても、無差別的にはなくその一人一人に特別が送られる。そして桃子への特別は桃子だけのためにあり、いい加減な気持ちと欲望でハーレム宣言をしてはいない。

「大切な人を1人には絞れないけど。当然、デバガメしてる健夜も大切だとか」

健夜は有力な目撃情報を持つと言われる家政婦の如く、部屋の入り口の影から甘ったるい雰囲気とセリフを目撃してしまった。年上ではあるがまだまだ乙女心を忘れていない健夜には刺激的な現場である。

「デバガメじゃないよ！ちょっとスネークさんになりきれなかっただけだもん」

この女性、小鍛治健夜はプロ雀士であり、若干常識がずれた相方とラジオで麻雀の解説をしている。真面目で穏やかな健夜に対して勢いのあるいい加減なトークが醸し出すギャップから地元では人気がある。

「はいはい、ケーキあるから食べるぞー？」

比べると酷い温度差なのだが、一瞬の内に健夜は目を輝かせて椅子に向かっていった。その変わり身の早さに戦慄を覚えながらも、保冷剤によってまだ美味しく頂けるであろうケーキを配る。

学生的身で高級なケーキとはいかなかったが、確かな幸福感で充ちていた。その微睡みのような感覚にあっても、桃子と健夜は前提的な違和感に苛まれていた。

「ところでこの人、誰っすか？」

一切の自己紹介をしないまま、了の買ってきたケーキに夢中になっていたのだが、そんな違和感の正体に桃子が気付いた。実際に言われてみて、ようやく健夜も納得した。

「それは、私も気になりました」

2人からは疑問の視線だけが送られるが、その中に負の感情は見られなかった。

「え？取り敢えず、美少女」

不覚にも美少女という評価に内心で喜ぶのだが、質問の主旨から外れているもどかしさに包まれる。了としても微妙に表現が難しかったので多くを語ることが出来ず、結局丸投げすることにした。

「良い機会だし、2人で話せばいいと思う。これは決して面倒だからなどという理由ではなく、何処か高尚な気品に満ちた理由があるんじゃないかな」

紆余曲折、むしろ何時も通りぐだぐだに進むことだけが理解できたので、2人はさっさとガールズトークに移行する。女子が3人に見

えた気がしたが、了はパソコンにゲームのインストールを開始する。

持て余す時間でひたすら椅子を回転させて遊ぶ了を他所に、女性陣は自己紹介から話題を展開させていた。

「了君はよく気遣ってくれるっすけど、いつもふらふらとしてるっすから」

共通で分かる了の話題になり、時折愚痴も入る。同時に送られるジト目にも、対象の了が気にする様子がない。

「うん。いつも恥ずかしい事言ったり、やったりするから。そのくせ皆あんまり嫌がってないみたいだし」

被害は多く、しかしそこに不快感は残さない。人柄か、見極めた結果か、周囲の気苦労が絶えないことに変わりはないことだけが確実で、自然と溜め息が重なる。

健夜は麻雀のプロであり、まとまった休日が取れたので了の住まいに立ち寄ったのだが、偶然にも桃子との熱い抱擁に会った。了と麻雀をしたことのある桃子だが、その道のプロについては無知だった。

麻雀の内容は皆無だったので関係のないことだったが、ラジオ解説を勤めていることから、健夜は実力があり人気も高い。結果的に健夜と桃子は随分と仲が進展し、了への不平不満を流しながら何気ない幸福感を漂わせている。

了も、いつの間にか椅子の回転を止めて若々しい2人をニヤニヤと眺めていた。ただ、健夜には何故桃子の存在を認識できたのだろうか。桃子にはその原理は分からなくとも、了の持つ何かによってもたらされている、とだけ理解していた。

牌譜13：『ステルスとスネーク』（後書き）

今回の注釈ですが、健夜は桃子をはっきりと視認しています。

次回、予定が変わらなければ主人公の能力説明を盛り込んだものになります。少し整合性が取りにくい表現があって難航しそうですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8337p/>

咲-saki- 『花鳥風月の牌譜』

2011年9月13日19時37分発行